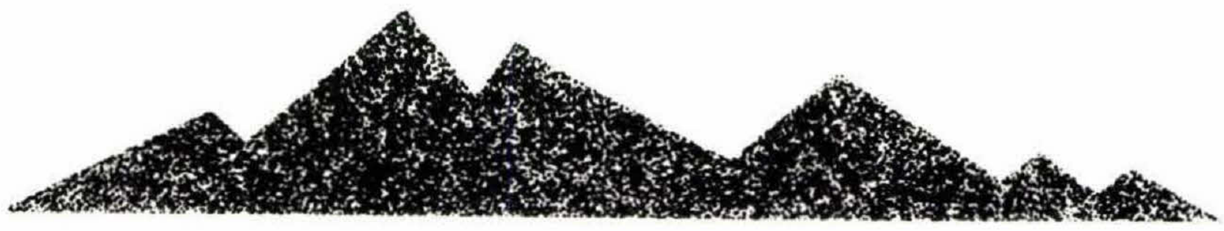
針葉樹会報

1992. 11. 第78号



針葉樹会報　第78号

目　　次

四川省・甘孜藏族自治州―雀兒山周辺を探る……　中村　保　1

二月のトロンパス越え……　中島　寛　8

タスマン氷河の山々……　有賀　盈　14

スウェーデン最高峰ケプネカイセ……　原　博貞　15

お薦めの山・メッテンホーン……　石　弘光　17

中国・四川省三題……　中村　保　18

初秋の甲斐駒ヶ岳……　西牟田伸一　24

平成４年度　針葉樹会総会……　26

編集後記……　28

表紙写真は　中国四川省 雀兒山 山群の一部

四川省・甘孜蔵族自治州
雀兒山周辺を探る

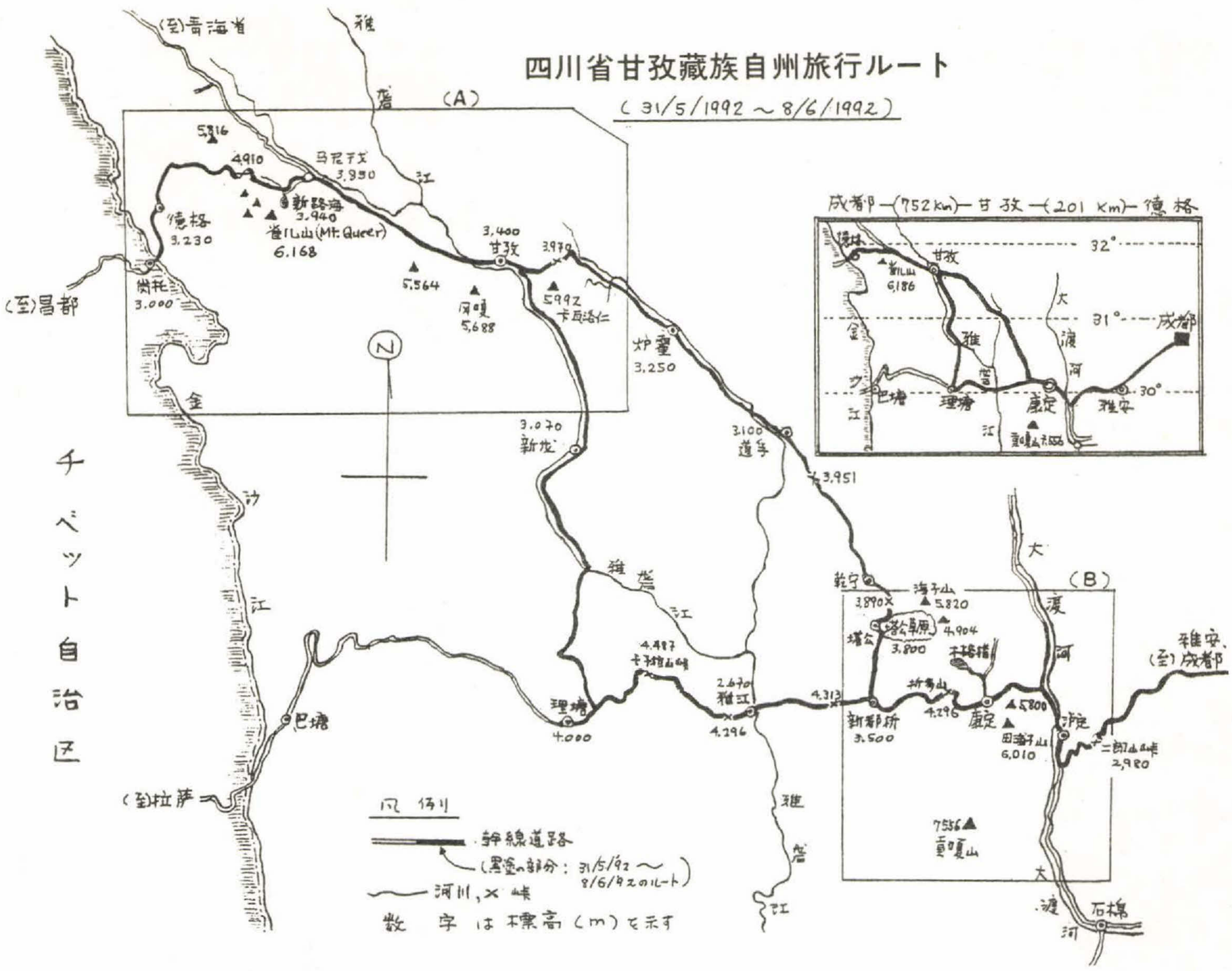
雀兒山山群の無名峯（約5,000 m）

1992年5月30日～6月9日　　中村　保

多少の難儀はあったが、四回目の四川の旅を無事終えることができた。一昨年の四姑娘、昨年の西昌から海螺沟、今年正月の峨眉山、雷波と四川通いが続いており、今回はその仕上げの意味をこめて孜甘周辺の雪山と雀兒山山群からラマ僧院で名高い徳格をコースに選んだ。できれば昌都まで足を延ばして東チベットの核心部を探りたいがまだ未開放でその許可はとれない。

同行者は香港ポスト編集長の大住氏、現地での手配は成都の四川登山協会のリエゾンオフィサー張継跃氏に一任した。同氏は登山よりはむしろラフティングのプロであり一九八六年の米中合同の揚子江の初めて成功した遠征に参加している。アレンジはほぼ満足のゆくもので、トヨタランドクルーザーの運転手も実に男気のある骨惜しみしない好漢に恵まれた。総走行距離二四〇〇kmの可成りハードな行程であった。以下日程、地図、印象を記し旅行の概要を紹介する。写真を併せ幾葉かをご披露させていただきたい。

五月三〇日　香港―成都
三一日　成都―二即山―康定（雨）
六月　一日　康定―塔公草原―道孚（晴）
二日　道孚―甘孜―新路海―雀兒山峠―徳路（晴・曇・雪・雨）



三日　徳路—金沙江—雀兒山峠—新路海（曇・雨・晴）
四日　新路海—甘孜—新龍（晴・曇）
五日　新龍—理塘（雨・曇）
六日　理塘—雅江—康定（曇・雪・雨）
七日　康定—木格措—泸定（曇）
八日　康定—二即山—成都（晴）
九日　成都—香港

一日の行程は二五〇～三〇〇km、十時間前後で六月七日以外は結構きついドライブであった。ルートはスケッチマップをご参照いただきたい。

一、康定（打箭炉）

往時泸定橋を渡ればそこはチベットであった。ダライラマ朝貢使節団一行もここで大渡河を越え中国に入った。西康の玄関口、かつての打箭泸、今の康定には昔の面影はない。コンクリートの箱を並べた中国のどこの都市にも共通する風勢のない街に変わってしまっている。が、川蔵公路の要衝であり活況を呈しており、街灯もつき都会的になっている。

谷あいの街から西へ、公路は一気に四二九六mの折多山口に登る。貢嘎山山域北端の六〇〇〇mクラスの雪山が次々と雲間に姿を現わすが、大渡河流域は谷深く、不安定な天気のためもあって、山々の位置関係を特定することが難しい。中国側で公開されている資料乏しく、同行のガイドも知識なく関心薄いので正確な概念はつかみようがない。成都から一日の至近の場所なのでいずれ腰を落着けて調べてみたい。

貢嘎山(7,556m)

二、塔公草原―海子山

折多山から地形は比較的ゆるやかな隆起に変る。ヤクとチベット人の世界に入る。とは言え漢族の進出は早くから行われており街の中心は中国人が商業活動を午耳っている。山森さんに教えられていた通り、新都橋の少し手前で貢嘎山の鋭角的な勇姿を望ことができた。今年の元旦に雪の峨眉山山頂からの眺望以来である。四川の山口の中では矢張り群を抜いて高く聳えている。

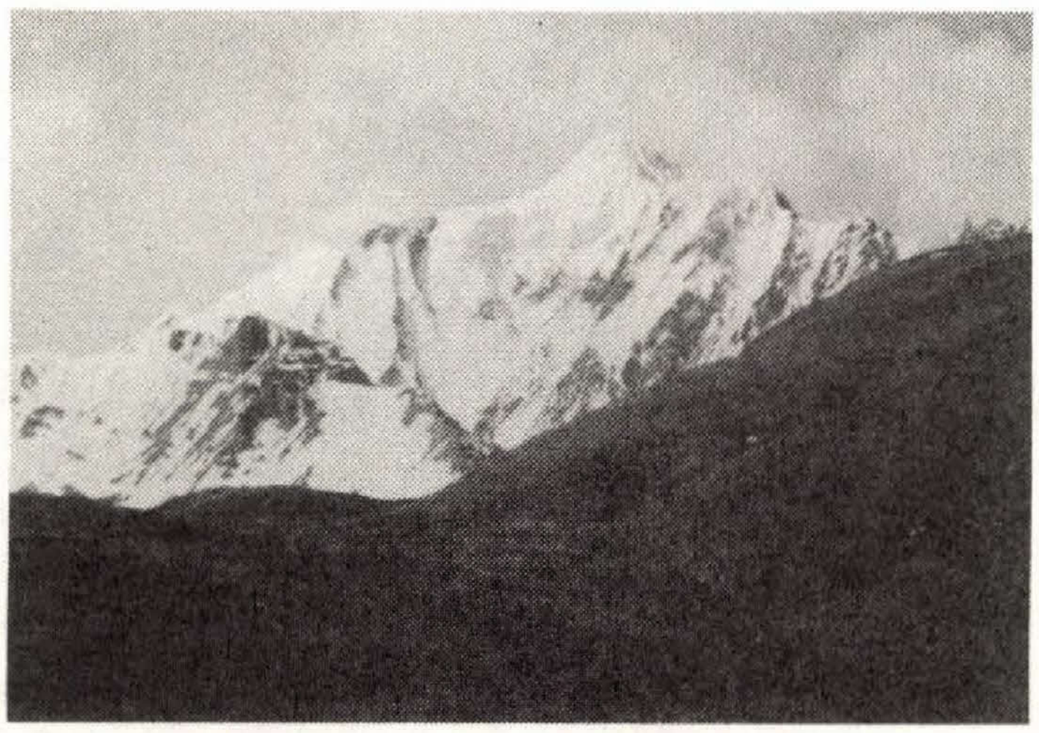
新都橋の少し先で川蔵公路を別れ、青海へ抜ける幹線道路を甘孜に向う。先ず塔公草原の雄大な景観に感激した。ロードマップからは想像のつかない風景である。三八〇〇mの広大な草原の正面に未登の海子山五八二〇mが突然視界に飛び込んできた瞬間の気持たるや、全く予期していなかっただけに言葉を失った。今から半世紀以上前、タイクマンは旅行記で康定から道孚に向う途中幾度か雪山にふれているが、この海子山はそのうちの一つであろうと納得した。

草原の手前にラマの僧院塔公寺がある。子供の日とかで、草原の端にテントをしつらえ賑やかな行事に近在から多勢集まっていた。漢族の外国人に対する無関心さ、排他性に比べて、中国辺境の旅でいつも感じることだが、チベット人も雲南の少数民族と同じように人なつこく、ホスピタリーティーが高い。車を止めると好奇心まる出しで集まってくる。なかには日中戦争時の銃剣の剣の部分を刃として使っている者もいた。この塔公草原は最近康定地区の観光地として注目されはじめている。パンフレットにも載っており、その値は十分あると思う。

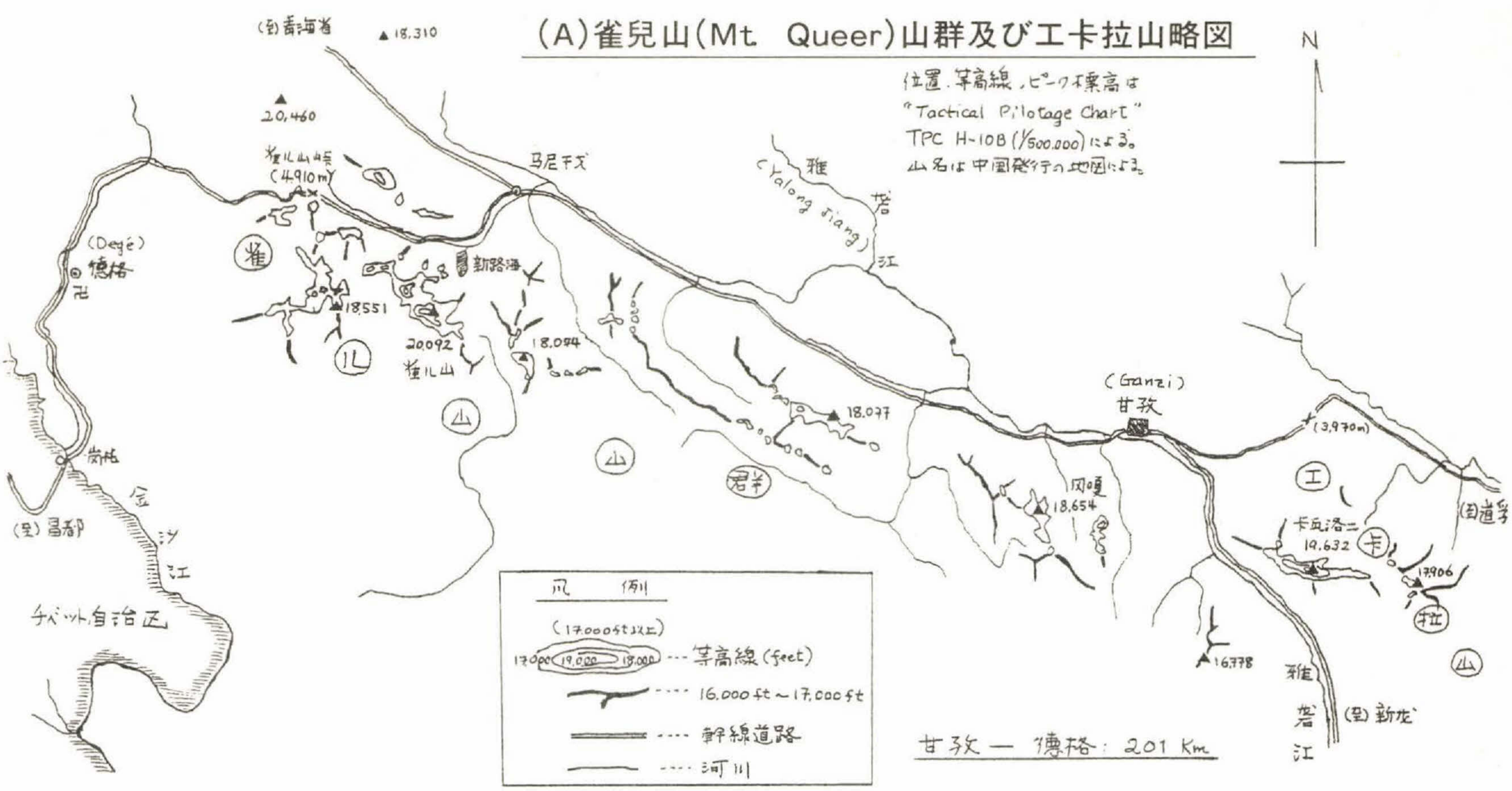
海子山(5,820m)

三、工卡拉山―未踏の秀峰

塔公草原から四〇〇〇m弱の峠を越えて雅砻江の支流に入る。相当の悪路に加え、車が舞い上げる埃にうんざりする。埃にはその後終始つきまとわれることになった。険阻な雅砻江も北へ上るにしたがい谷は開けてくる。おだやかな谷筋の風景が展開する。美しい小さな湖が現れる。ひどく無残な光景にもぶつかる。文革時代に破壊されたラマ僧院の跡だ。同行のガイドとドライバーは漢族なので全然注意を払わないが。再び四〇〇〇m前後の高原状の分水領を越えて雅砻江の本流に北岸の州都の甘孜に下る。スケッチマップ（A）を見ていただきたい。工卡拉山塊の主峯、卡瓦洛仁山、五九九二m北面を視界にとらえることができた。たおやかな秀峯である。これほどアプローチが容易で、いまだ未踏とは信じ難いが事実のようである。前述の塔公草原の海小山と言い、早く手をつけねば



卡瓦洛仁山(9,920m)



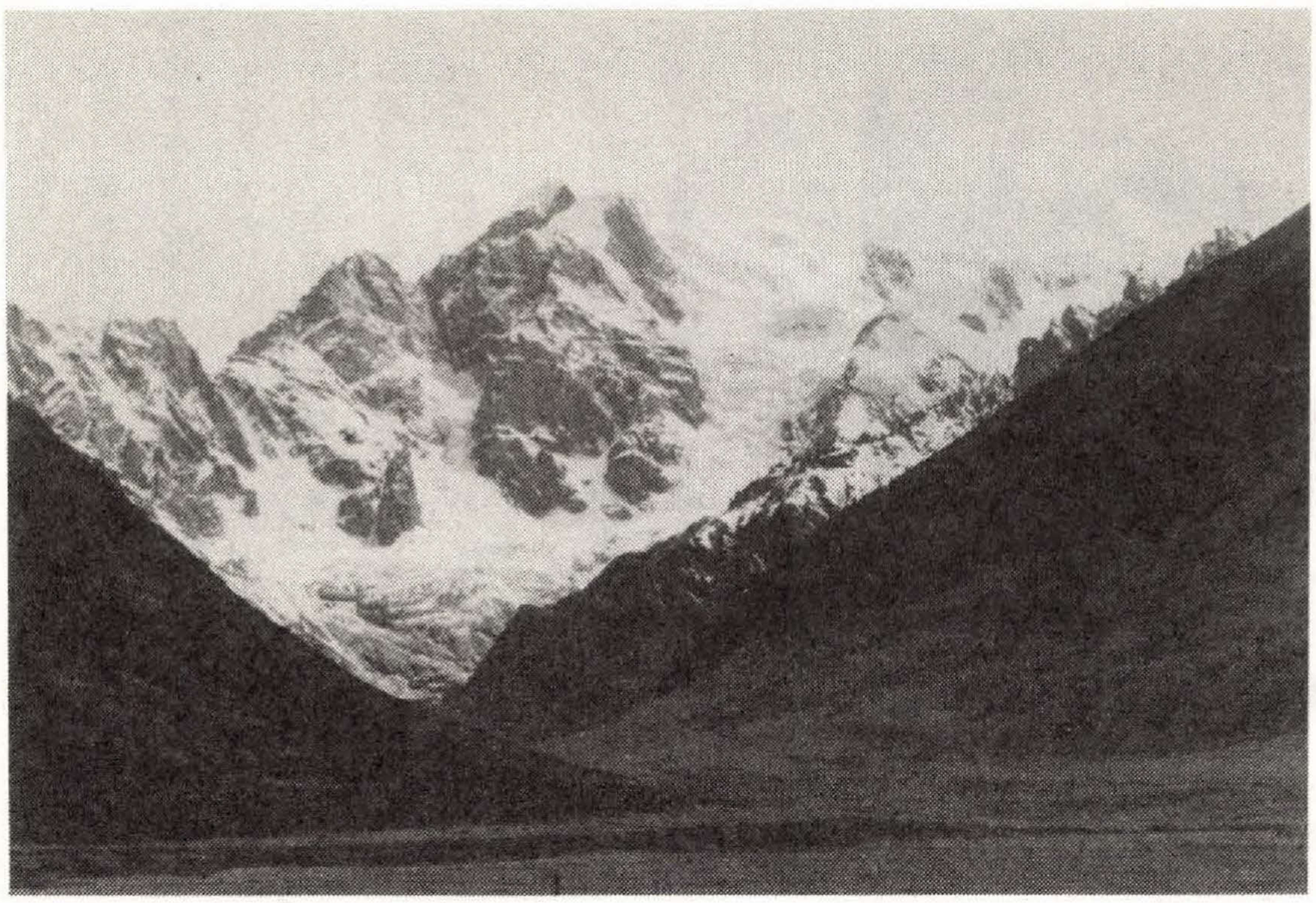
とあせる気持が働く。登山の主流からみれば四川省の山は貢嘎山を除けば、同じ暇と金をかけるには不足だろうし知名度も少いし、また中国側の入山に対する制限もあろうが、もう少し関心が集められてもよいと思う。そして未だ知られていない雪山も数多いと推測されるので、さやかな探検的気分もごく手軽に味わうことができる場所として同好の方々に知っていただきたい。今は行政的には四川省、かつては西康省、さらに昔は東チベットの小公国の支配下にあったカム地方は中央チベット、西チベットとは趣を異にする人を惹き付ける土地である。

甘孜の南側の山群の山

四、甘孜—五体投地礼

甘孜は長江の四大支流のひとつ雅砻江の上流の北側が開けた谷に位置する褐色の埃りぽい特徴のない街である。康定とは大いに違う。しかし雅砻江とその支流にそって南側に居並ぶ連山は壮観である。東端は雅砻江をはさんで工卡拉山と対峙している。西は雀兒山山群に連なっているが、どこからが雀兒山山群と呼ばれるのか誰も特定できないだろう。中国発行の地図では

雀兒山山群の東端の山



雀兒山主峰（6,168m）

五体投地礼

判別のしようがないし、答えてくれる人もいない。いずれにしても五〇〇〇～五六〇〇mの雪山が延々と続いている。

帰路であったが、期待の五体投地礼の巡礼に会った。三二才のラマ教徒。実によい表情をしている。おでこのタコに砂がめり込んでいる。

「どこから来て、どこへ行くのか」

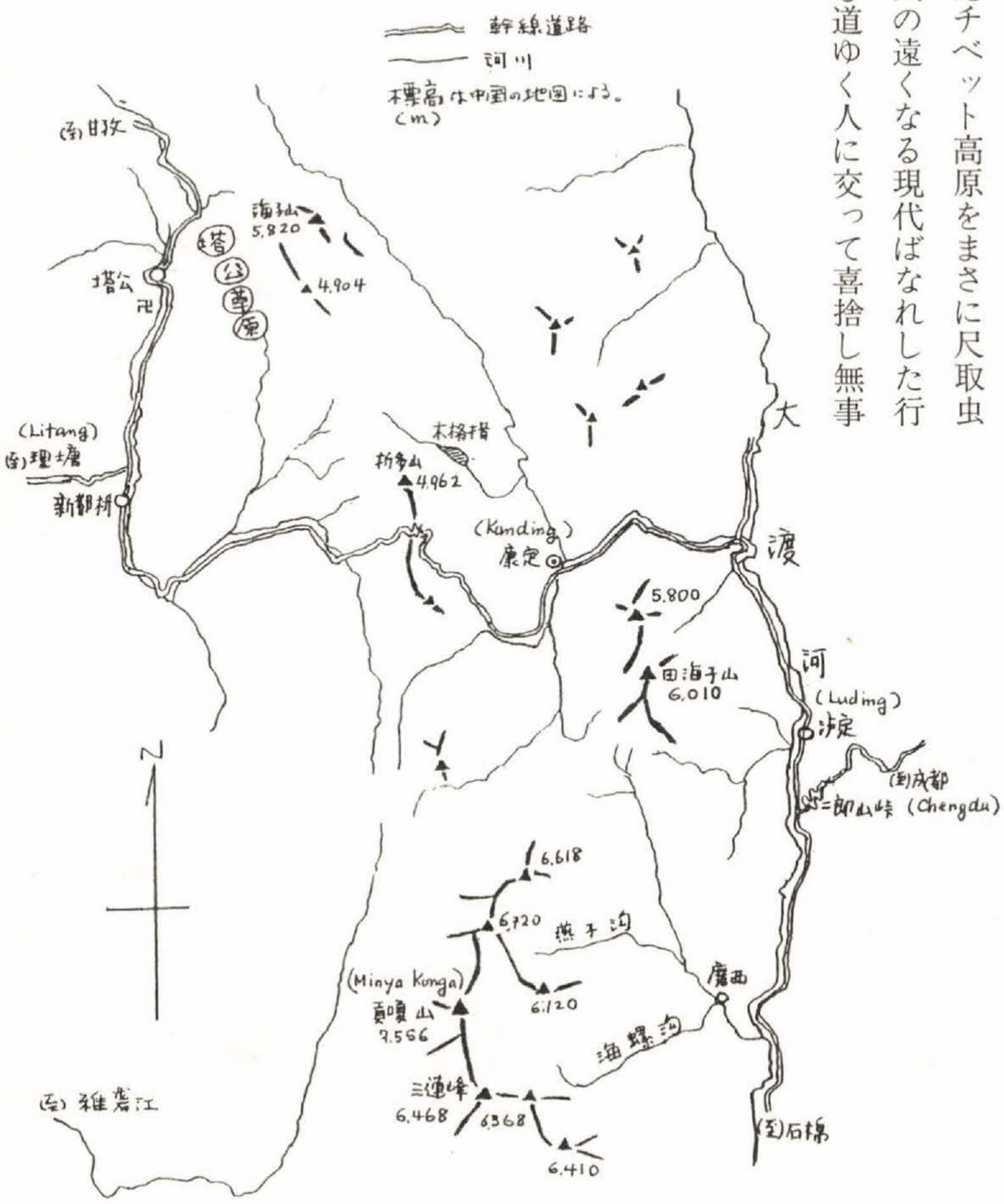
「甘粛省から来た。徳格、昌都を経てラサまで行く。あと二年ぐらいかかるだろう。」

頭陀袋一つで長途の旅である。五〇〇〇m近い峠を幾つも越えチベット高原をまさに尺取虫の足どりで歩む気の遠くなる現代ばなれした行動である。我々も道ゆく人に交って喜捨し無事を祈った。

五、雀兒山―四川最奥の山々

雀兒山は青海省え抜ける公路の南側に連なる山群の総称である。主峰六一六八mは一九八九年に神戸大・中国合同隊が登頂したと聞く。山群のどこからどこまでを雀兒山と呼ぶのか前述のごとく特定する資料がないが、徳格に下る雀兒山峠（四九一〇m）の西側の山塊から甘孜近くの山まで含めた山域を考えて大過ないだろう。五五〇〇m以上の雪山が居並ぶ大きな山群

(B)康定周辺の主な雪山



であり、無数の岩峰が印象的であり、現役なら登攀意欲をそそられるピークが多い。

青海省への公路は馬尼千戈で別れて徳格への道を辿る。主峰直下の新路海はエメラルドグリーンの氷河湖で針葉樹に囲まれたそのたたずまいはJade Dragon Lakeとも呼ばれ、世界で最も美しい湖の一つと英国人をして言わしめている。湖畔にキャンプする。遊牧のチベット人達が寄ってきて終日離れようとしない。極端に貧しいが表情は明るく人なつこい連中である。しぼりたてのヤクの乳をご馳走になる。

新路海と雀兒山の一部

峠の道は雪山のふところの谷に入る。南側に雀兒山北面の支谷、岩峰が次々に現れる。大きくジグザクに高度を上げ四九一〇mの雀兒山峠に着く。下での雨が雪に変り相当寒い。峠の積雪は約一米。往路は雪で視界悪く早々に徳格に下ったが、帰路は天気回復し雀兒山北部の山々を写真に収めることができた。非常に複雑に山塊が重なり合っており、岩峰、雪峰と無名のピーク連続である。地図と写真でその一端を知っていただくしかない。

峠の西側へ徳格をめざして下る。雀兒山は雅砻江と金沙江（長江本流）の分水領になっている。したがって西側は金沙江の流域である。はるか昌都方面を遠望する。高峰はもう視界にないが、重畳たるカム地方の谷深い山なみが涯しない。名著「秘境西域八年の潜行」の西川一三はその本の中で、昌都から康定を目ざしたが、途中の峠に山賊が巣くっていて危険なので断念したと記している。

六、徳格—金沙江

雀兒山峠から徳格への下りはアルプス的な谷である。針葉樹が多く清流に沿った道はやがてゴルジュとなり金沙江が近いことを知らせる。雨の中を徳格に着き政府招待所に泊る。いつもながら心に描いていた風景とは異り、徳格は谷沿いにへばりついた街である。木版によるお経の印刷で有名なラマ僧院が色鮮やかで、お経を書いた白い帯状の布がいたるところにかけられている。

徳格から金沙江のほとりに下る。金沙江がチベット自治区との省境になっている。ここから先は外国人はオフリミット。大きなアーチ橋を渡り、チェックポストで五元握らせてチベット側に入る。ゴルジュ沿いの公路は、そのまま進めば一日半で昌都に至る。しかしすぐ引き返した。西欧人のトレッカーは無許可で強引にチベット側へ入ってしまう輩も居る由、日本人ではなかなかそんな真似はできない。この地点は金沙江ラフティングの中継地になっている。上流は比較的容易で中級のコース。下流は難所が多く、巴塘まで三ケ月を要すると言う。

七、理塘—ラマ僧院

帰路は甘孜から雅砻江沿いの道を通り、新砻を至て理塘プラトーに出る。新砻は材木の集産地、江沿いの支谷は針葉樹の伐採が行われており材木運搬のトラックが行きかう。理塘の手前の草原でチベット人のテントに入りもてなしを受ける。ヤクの乳、バター、ツアンパ等々生活

▲理塘付近

▶砂のマンダラ

の一端を気分よく披露してくれる。この辺のチベット人は薬草類を商売にしており、収入は結構あり豊かである。冬はカーボーイだけをテントに残して家畜の面倒を見させ一家は町場の家で過す。

理塘のラマ僧院ではラマ（高僧）と会見することができた。なかなか知性的な人で、政治情勢にも明るく、ダライラマの帰還を待ち望んでいるとの勇気ある発言も聞くことができた。また折よく修行僧が砂マンダラを描いているところも偶然見ることができた。砂状の顔料を円錐状の細い筒に入れ、その先から少しづつ出して数人で色彩鮮やかなマンダラを描いてゆく。完成に三日かかる。別世界に遊ぶ気持だ。若い僧達も屈託ない。

理塘から康定へは四三〇〇m前後の峠を四つ越へる川蔵公路をひた走る。石南花の群落、急変する天気、大つぶの雹、豪雨と変化に富んだ一日であった。大住氏は康定で温泉に泊る。

八、再び二郎山越へ——田海子山

最後の日、泸定から二郎山を越へる日は好天に恵まれた。一方通行の難所は殆どが材木運搬用のトラックが長蛇の如く連なる。今まで見ることができなかった田海子山六〇一〇mが正面に姿を現している。貢嘎山山域とひとくくりに扱われているが、地形的には独立の山塊とみてもおかしくない。まだ未登の由で、今年長野県の学生がトライするとガイドは言っていたが、成否のほどは知らない。

前述したが、田海山を中心に康定、泸定近辺の山口はもっと整理されたかたちで紹介されてもおかしくない。長征の辿った「大雪山」にしても、具体的にどの山を指すのか、まだ知られざる雪峰があるのではないかと、僅かに点と線から想像して次なる旅への誘惑にとりつかれている。終りに、今回の山の記述について誤り、補足をご教授していただければ幸である。

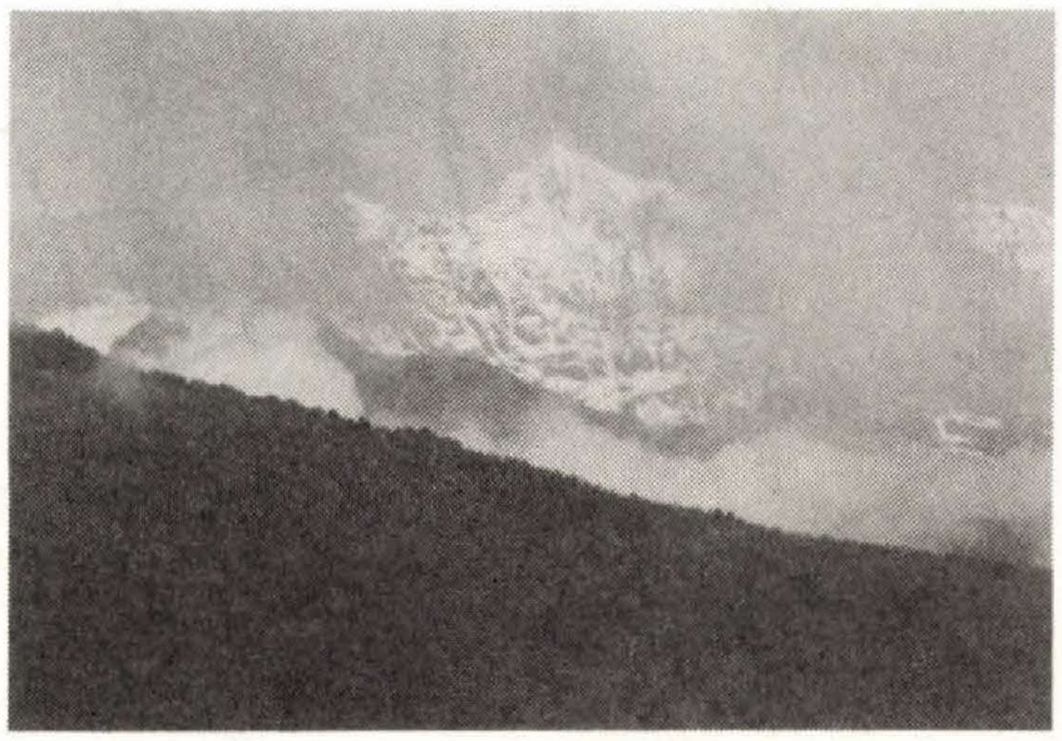
〔註　記〕

1　六月上旬を選んだのはこの時期が最も天気が安定し、道路の状態も落着き、暖かくもあるとアドバイスを受けていたため。

2　要した費用は次の通り。（香港－成都の航空運賃及び成都でのホテル代は除く。）

(A)　車　代：US＄0.60×　2,400km……US＄1,400
(B)　食　費：US＄20×9日×2人……US＄　360
(C)　ホテル代：US＄30×8日×2人…US＄　480
(D)　管理費（入域許可等）……US＄　100
　　合　計（2人分）……US＄2,380

上記にはキャンピング・ギヤー、カイド料、ガイドと運転手の食費、ホテル代を含む。



田海子山（6,010m）

二月のトロンパス越え

――ジョモソムからマナンへ――

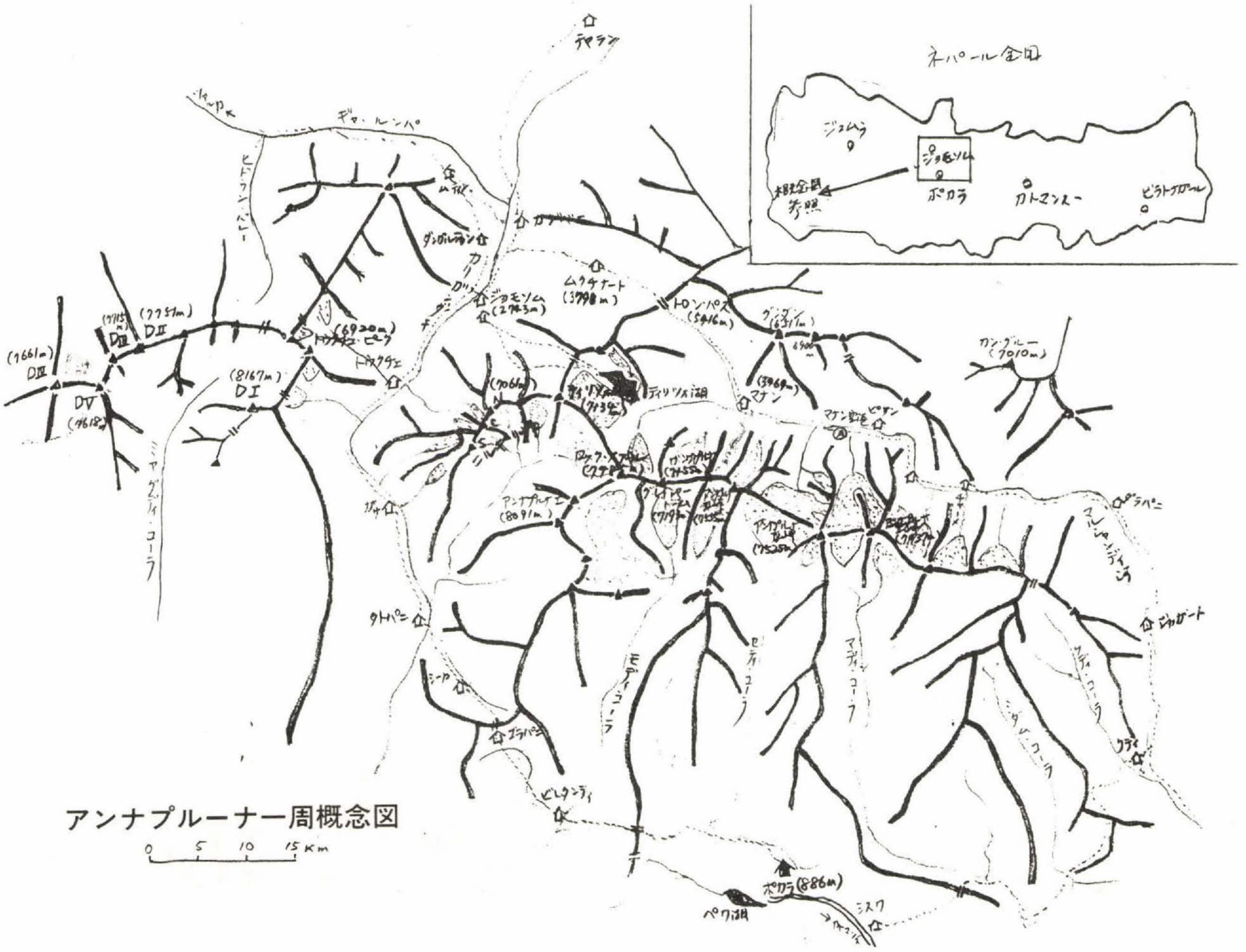
中島　寛

峠越えの魅力

「峠越え」を山登りの重要な要素としては位置づけ、登山やワンデリングとの関連において、その魅力を、流麗な文章で描いたのは、大島亮吉である。

彼が書いた「山―随想」という本を、最初に読んだのは、山のことを何も知らず、ただ山に憧れていた、高校生の時だった。「峠」という文章に、特に魅かれたのを、よく覚えている。最近、香港から帰国して、久し振りにこの本を読み返してみて、新鮮な感動を受けたが、同時に、長い間、意識せずに、若い頃の読書を通じて得たものに、けっこう大きな影響を受けていることに改めて気がついた。大島亮吉の「峠」という文章などもその例である。

一昨年、ランタン谷に入り、ガンジャ・ラを越えてタルケギャンに下った時、悟りを開いた、という程大げさではないが、何か、新しい世界が見えた感じがあった。そして、自然に、次は、トロン・パスを越えてみたいと思った。昨年の湾岸戦争のあおりで、結局、一年延びたが、この二月、ようやく念願を果たすことが出来た。しかし、これも、「私のなかの大島亮吉」



アンナプルーナー周概念図

の掌の上で、ただ踊っていただけかも知れない。

山は登って下るものだ。峠は越していくものだ。この単純な違いのなかに、峠に魅かれる何かが隠されている。

あれは、一九六五年五月のことだった。一年半の入院生活のあと、半年間のトレーニングを経て、改めて山登りを再開しようとした時、私にとって、山は、遠く、厳しく、恐くて仕方がない存在だった。もう駄目かな、と思ったが、悩んだ末、ひとりで、木曽駒ヶ岳に登った。木曽側から入り、登頂は、伊那側に抜けた。山に登って、そのまま下ることには、ものすごい抵抗があった。山を越えて、違う世界に入っていくということで、ようやく、何かがふっきれた気がした。ふと、そんな昔話を想い出したが、峰に対する峠のイメージが、自分のなかに根を生やして、私の永年続けてきた山登りの支えになってきたことは間違いない。

「逆キセル」の山旅

トロン・パスは、高度五三八〇メートル、アンナプルナ北面の、カリガンダキからマルシャディ河へ抜ける、ネパールでもよく知られた峠のひとつである。

この一帯は、アンナプルナ一周トレッキングの核心部であるが、少しでも、ヒマラヤ登山史をかじった人ならば、一九五〇年のアンナプルナⅠ峰発登頂を果たしたフランス隊をはじめ、数多くのドラマを生んだ、登山家たちの古戦場でもあることをご存知のはずである。歩きながらヒマラヤ登山の歴史をふりかえるのに、これ程格好の舞台はない。

その上、ここは、秘境のムスタンへの入口にあたる。ムスタン王国の首都ローマンタンは、今でも、外国人の入国を認めていない。そもそも、ジョモソムーカグベニームクチナートのコースが解禁されたのも、一九七六年のことである。それまでの二〇年間、この一帯は、ダライ・ラマのインドへの亡命（一九五九年ジッキム経由）にからんで、カンバ族が反乱を起こし、アメリカ、ソ連、中国、インド四ヶ国が介入した知られざる国際紛争の大舞台でもあった。

それだけに、河口慧海が、このルートを辿って、苦難の末、一九〇〇年に、ネパールからチベットに入ったことの意義が鮮やかに浮かび上がってくる。慧海が一年間滞在して、チベット語を学び、チベット潜入の機会を伺ったチャラン（「西蔵旅行記」のなかではツアーラン）は、ムスタン王国の玄関口、今回われわれが歩いたジョムソムからムクチナートへのコースの少し北に位置する。

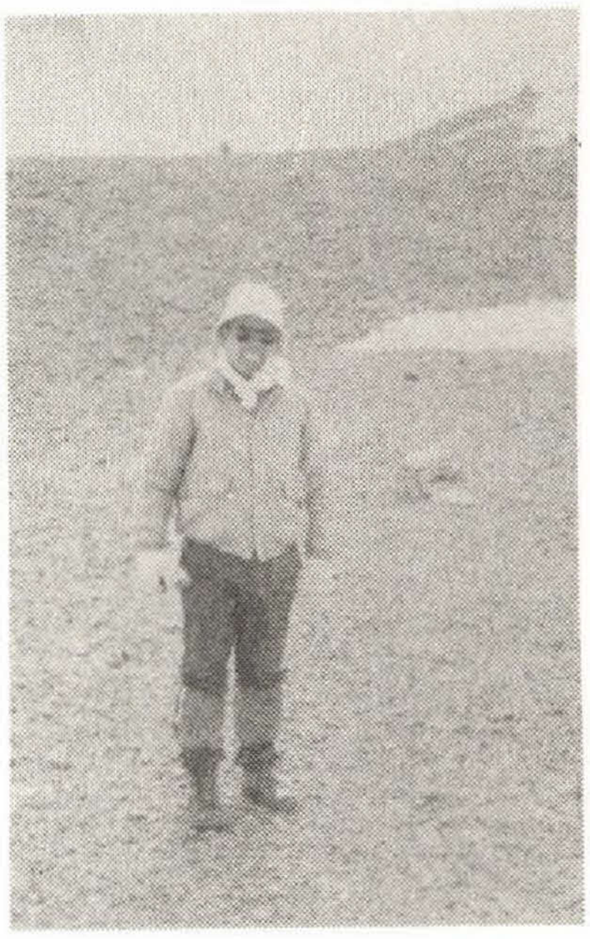
こういうところを自分の足で辿ってみたいと思うのは誰しも同じだろうが、問題は、時間の利益と高度の影響である。

ポカラからトウクチェ、ジョモソムを経て、トロン・パスからマナンに出、チャーメ、ジャガート、シスワを通ってポカラに戻るアンナプルナ一周をすると、早くても三週間、普通だと、一ヶ月近くを覚悟しなくてはならない。

私の場合、どんなに長くても、一週間の休暇をとるのがやっとである。それなら諦めるか？知恵を絞って、文明の利器を最大限駆使して、核心部だけでも楽しむ方法はないか？　意思あるところ、何とか道は開けるものである。カトマンズを出発してラッサに到着するだけでも二年以上かけた河口慧海とは正反対だが、今では、インナー・ヒマラヤも近くなったものである。ポカラからジョモソムまで定期使の飛行機に乗り、ジョモソム―ムクチナート―トロン・パス―マナン間を四日間歩き、マナンからネパール陸軍のヘリコプターでカトマンズに戻ってくることが出来た。前後一週間の、かなり贅沢なトレッキングであった。ムクチナートの手前までは中村保さんが同行、全行程を宮原巍さん（日大山岳部OB、日本山岳会員、ヒマラヤ観

光開発㈱社長）と一緒だった。

キセル旅行という云い方があるが、われわれのトレッキングは、おいしい部分だけつまみ食いした「逆キセル」の山旅であった。


トロン・パスでの宮原 巍氏

「チベット高原から インナー・ヒマラヤへ」

今回も、香港の旧正月の休暇（今年は二月四日～六日の三日間）をはさんで、無理して一週間の休みをとった。

二月一日（土）ネパール航空で香港を発ち、三時間半でカトマンズ着。同行の中村さんは、このところ、香港を拠点に、中国辺境旅行に精を出しており、服装もキマっていて頼もしい。狙いは、三〇〇ミリの望遠レンズを装着したカメラを駆使しての山の写真のようだ。宮原さんの出迎えを受け、ホテル・ヒマラヤ泊。中村さんも私も、このホテルの建設には長い間関わってきたので、なつかしい。

二月二日（日）晴。トレッキング・パーミットを取得。ゆっくりとカトマンズの休日を楽しむ。

二月三日（月）晴。但し上空雲多し。カトマンズ発ポカラへ。念願のフィッシュ・テイル・ホテル泊。何もかも行き届いたリゾート・ホテルだ。ホテルは湖のなかの島にあるので、出入りは船頭の操るフェリーに頼らざるをえない。ジョギングと自転車でポカラの社会見学。

二月四日（火）晴。雲多し。今日からはいよいよ山の生活が始まる。六時、真っ暗な中、早朝の便に間に合わせるべくホテル発。夜が明けるとともに、マチャプチャレが顔を出すが、朝のうちだけだった。七時四十五分、満員のトウイン・オッター機が離陸する頃は、アンナプルナ連峰は、完全に雲のなかに隠れてしまった。

八時四十五分、ジョモソム着。カリガンダキの谷間の部落ジョモソムは、今でも西北ネパール要衝の地で、軍隊も駐在している。高度二七一三メートルだけあって、セーターを着込み、羽毛服を着ても、底冷えがする。宮原さん馴染みの家に上がりこみ、コタツに入って朝食をすませる。リンゴの産地だそうで、日本の技術協力も行なわれており、つい最近、日本に研修に行ってきた若い女性が、上手な日本語で話しかけてきたのには驚いた。

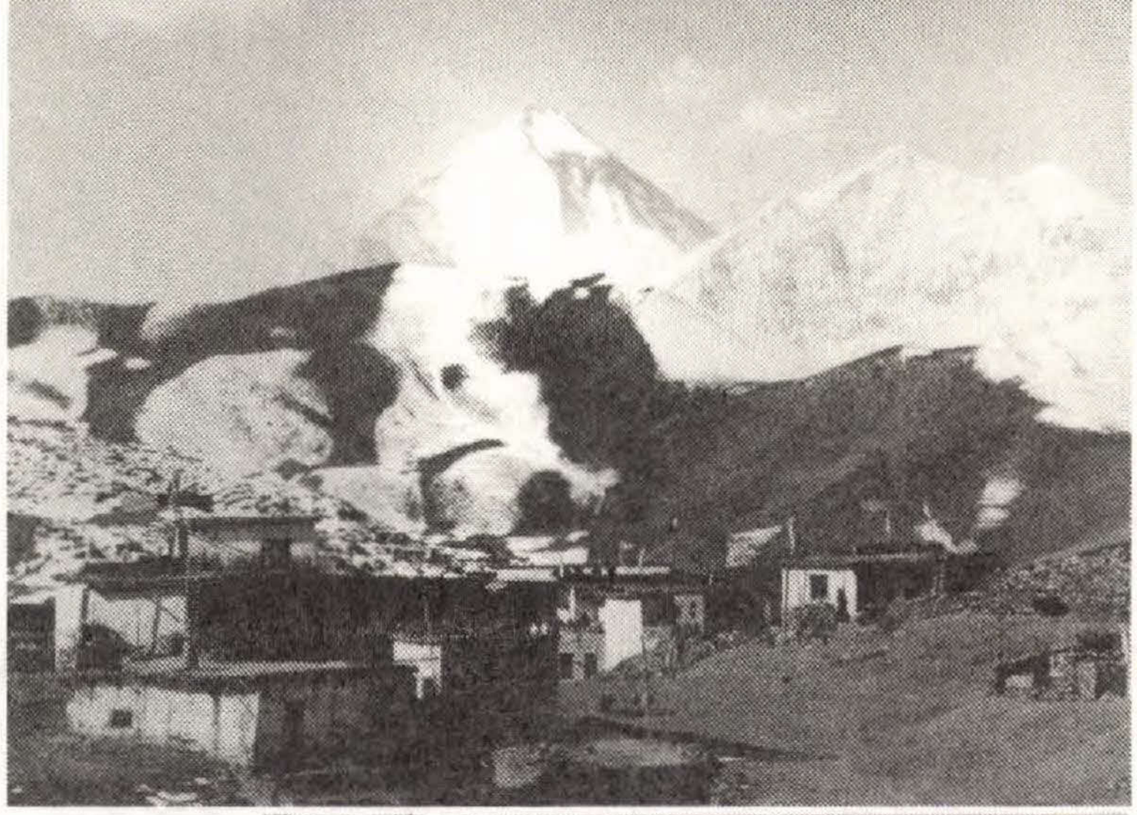
チェックポストに立ち寄った後、十時半、ジョモソム発。中村さんと宮原さんは馬に乗り、私は徒歩。河口慧海も歩いたカリガンダキの広い河原沿いの道である。多分、百年前とそれ程変わっていないのではないか。

ツクチェ・ピーク（六九二〇メートル）とダウラギリⅠ峰（八一六七メートル）がいつでも背後に聳えていて、とてつもなく大きい。

河岸断丘上のカグベニ部落の僧院の赤い屋根がどこからも見えるが、いくら歩いてもなかなか近づかない。カグベニ手前で、道が分れ、ムクチナートに向かう尾根沿いの道を辿る。この付近は、どこもかしこも、荒涼とした茶褐色の山々が連なっていて、チベット高原につながっているようだ。

十五時三〇分、ジャルコットの一番下の部落

ムクチートへ登る途中から見た
カリガンダキ。中央はカグベニ部落



ムクチナート手前の部落からダウラギリエ峰(8,167m)とトゥクチェ・ピーク(6,920m)を望む

で宿泊とする。レストハウスの屋上にテントを張る。高度三六〇〇メートル。夜半、宮原さんが予め手配してくれていたシェルパ二名、ポーター三名が到着。にぎやかになる。

二月五日 晴。睡眠は浅かったが、さわやかな夜明けだ。荒涼とした山間の部落も、柳の樹が朝の陽光を受けて、美しい。七時半出発。ジャルコット、ムクティナートと尾根の鼻につくられた城砦の部落が続く。ムクチナートの手前、ダウラギリI峰を真正面に眺められる地点で、ゆっくりと写真を撮った後、十時半、中村さんが帰途につく。宮原さんも、そこで馬を返し、徒歩で登りにかかる。

ムクチナートは三八〇二メートル、ヒンズー教とラマ教の聖地である。よく整備された大きなラマ教のゴンパには誰もおらず、静まりかえっていた。ヒンズー教の聖地のシンボルである百八つの龍頭の口から流れ出ている水もほとんど凍りついており、白いタルチョウの列が風にあおられて、ヒューヒューと音をたてていた。

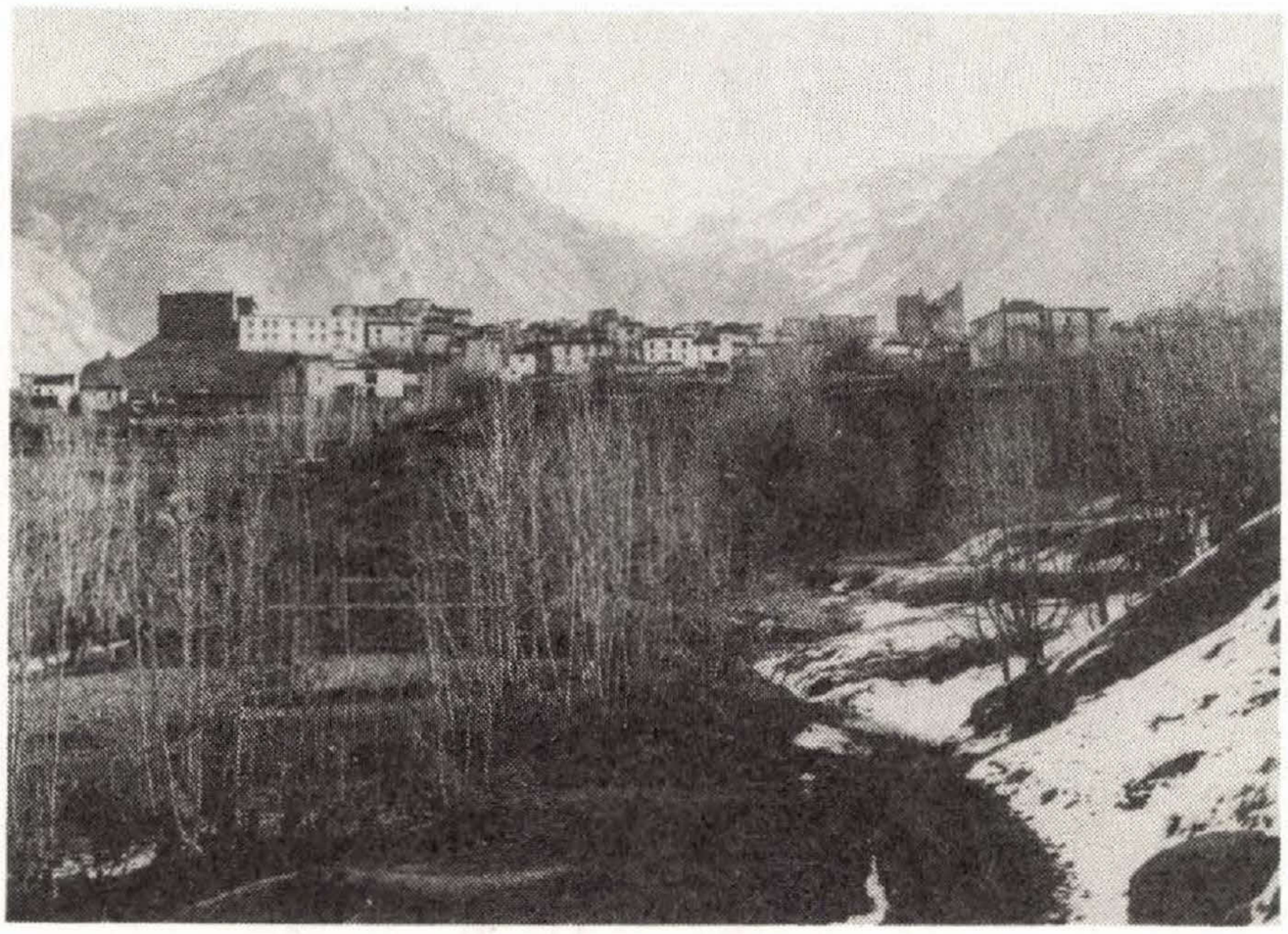
トロンパスへの登り

ここから先、もはや人家はない。トロンパスまで広い谷がゆったり登っている。この高さになると、何回も経験したことだが、ヒマラヤの大きさをいやという程痛感する。気は急いても、なかなか高度を稼げない。

十五時三十分、四三〇〇メートル地点で幕営。雪を溶かして炊事をする。

二月六日 晴のち曇り。終日風強し。今日はいよいよトロンパス越えである。七時三〇分キャンプ地発。気温は零下一〇度以下まで下がった。モレーンの上に薄く雪がのっている道を、思い思いにゆっくり登っていく。周囲が全て茶褐色の世界なので休憩の時ふと見たニルギリ北峰(七〇六一メートル)の白いピークが印象的だった。

トロン・パス(五三八〇メートル)は、広い峠で、大きな石塚(ラプツェ)の上にタルチョーが風にはためいていた。十一時三〇分着。後続を待つ間、一時間以上、羽毛服を着込み、風下に横になって、吹き抜ける風の音を聞いていると、エベレストの高所キャンプの時の孤独感がふと甦ってきたりした。単独行の大柄なスイス人が、犬を伴ってやってきた。彼は、昨日もムクチナートからトロン・パスまで登ったが、単独のため引き返し、われわれが峠を越えるのを知って、もう一度登りかえしてきたのだった。部落の犬が人なつっこく、どうしても帰らないので一緒に来たと云う。黒い、小柄な雑種



ムクチナート遠望

である。この犬は、そのまま峠を越してトロン・ペディまで同行し、翌日、ひとり戻っていった。この峠を越えるトレッカーは、年間、数千人になるらしい。何百年に亘って、住民の重要な生活路、交易路として利用されてきて、その役割は今日でも変わっていない。しかし、どこにも人間くささが残っていないのがヒマラヤの高所の峠の特色である。

下りは、ムクチナート側と異なり、谷が入りくみ、傾斜も急で、ルートを間違えやすいところが多く、経験豊富なシェルパの判断に頼ることが多かった。一ヶ所、氷の滝が露出しており、大きなトラバースを余儀なくされ、ラッセルに苦しめられた。一昨年のガンジャ・ラからヘランブーへの下りと同じように、すぐ近くに見えながら、トラバースの連続で、雪のなかのラッセルを続けていると、遅々として進まない。

降雪後のマナン遠望

トロン・ペディ（四四二〇メートル）の小尾に着いたのは、一五時三〇分だった。

マナンにて。

二月七日　雪。夜半から降り出した雪が終日やまず、積雪は一五～二〇センチになった。前日は晴れていたので、トロン・パスまで登るのを楽しみにしていたヨーロッパ人のトレッカー達は、がっかりして、半分は停滞、半分はわれわれの踏み跡を頼って下山にきりかえた。気温も零下二〇度近くまで下がる。

八時三〇分小尾発。吹雪のなか、踏み跡の消えた雪原のなかを下るのは骨の折れる仕事だが、今日もシェルパ頼みである。

途中、レオパードの写真を撮るために、半年以上の間頑張っている日本人カメラマンのテントの側を通った。テントはほとんど雪に埋れたまだった。

途中、出来たら廻り道をして、ティリッツォ湖まで往復することを考えたが、日程と積雪の状態を考慮して断念する。

マナン着十五時三十分。連日の強行軍で疲れたシェルパ達の意向を受け入れ、部落の中心部にあるレストハウスに泊ることにする。

マナンは、マルシャンディ河上部の、アンナプルナ山群とその北方約三〇キロのチベット国境に続く六〇〇〇メートル級の連山の間に横たわる、通称マナン盆地の中心地である。人口は約三〇〇〇人、飛行場もある。

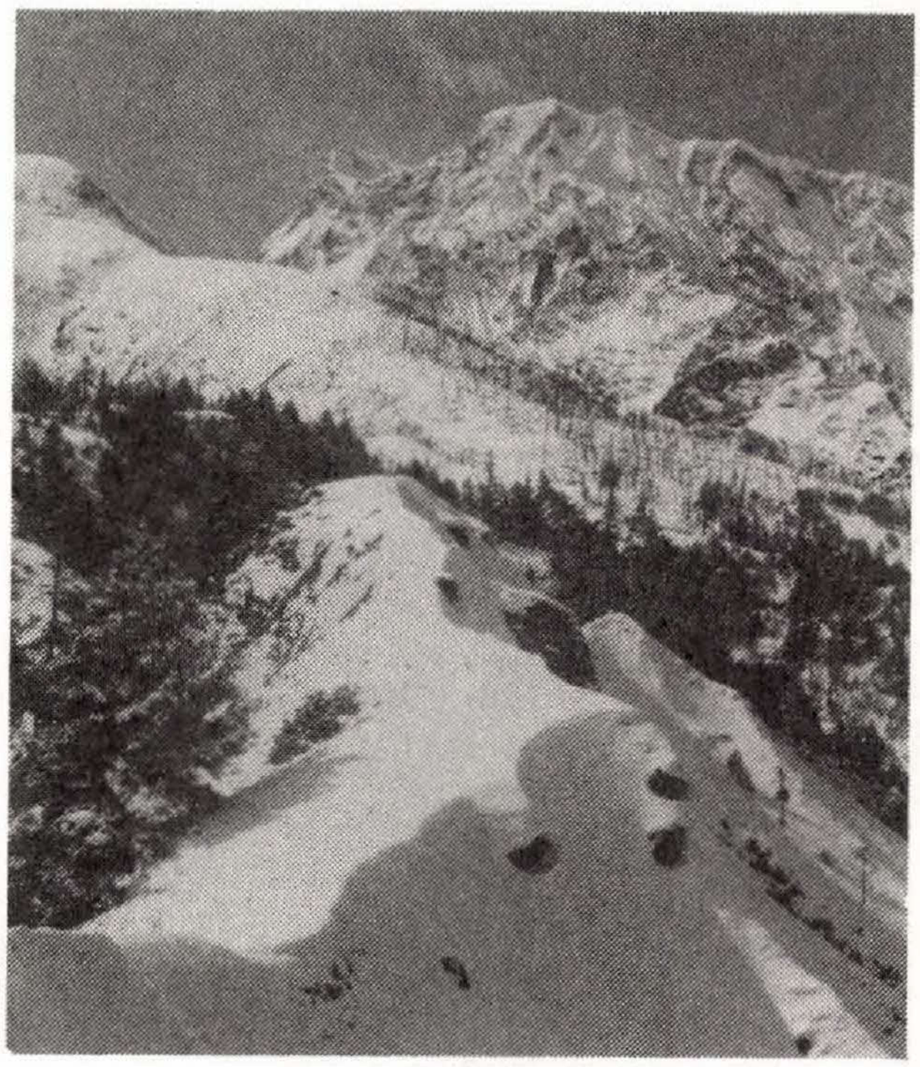
マナンは、美しいところだが、チベット系の住民は、すれっからしが多く、不愛想で、遠山隊には非協力的であるという話は、ティルマンの「ネパール・ヒマラヤ」にも詳しく書かれているし、一九六一年にアンナプルナIII峰（七五五五メートル）に登頂した時のインド隊の隊長だったコーリさんから直接聞いたこともある。

たしかにマナンは静かできれいだった。新雪の直後だっただけに、ガンガプルナ氷河がすぐ近くに迫っている村の風景は迫力があった。住民のすれっからし振りについては、よくわからなかったが、宮原さんの話によると、シンガポールとか香港で貿易に従事しているネパール人の大半はマナン出身とのこと。ネパール政府も、以前、マナンがカンバ族の自主独立運動の本山であっただけに、政府への協力とひきかえに、マナン住民に特別の海外渡航ビザ枠をふやすといった恩恵を与えているようだ。それだけ

に、こんな山奥の小さな部落にもかかわらず、マナンは、あるいは、カトマンズ以上に国際的に開かれているかもしれない。電気製品もあふれている。彼らはチベット系なので、どういう正月を迎えているのだろうかと思い、質問してみたが、「一月一日に簡単な儀式をやるだけ。旧正月はまったく関係ない」という返事が返ってきた。一昨年、タルケギャンで体験した、子供達の爆竹で始まる旧正月の朝の行事をなつかしく想い出した。

二月八日　晴。久し振りに熟睡する。マナンは高度三五三六メートル、飛行場のあるところは、マルシャンディ河に沿って約十キロ下ったホングデ（三二八〇メートル）なので、朝一番の飛行機に間に合わせるべく、ともかく四時四十五分に出発する。外は真っ暗だが、昨日とうってかわった快晴である。空を見上げて、改めて、星の美しさにびっくりする。昨日の降雪は、谷あいの方が積雪量が多かったようだ。所々、五〇センチ以上の積雪である。

ブラーが部落を通過して、夜明けの道を急ぐ。ぶなやこめつがの森が続く。松もけっこう多い。その彼方にアンナプルナIII峰（七五五五メートル）のピークだけが朝日を浴びて顔を出す。氷河の舌端が目の前に迫っている。夜明けの山の素晴らしさは、どこも同じだ。


マナン空港近くの小丘からみた
アンナプルIII峰（7,555m）

宮原さんは、「ネパール中たくさん歩いたが、スイスのように資本を導入してホテルやケーブルカーの施設をつくり、かつ、自然を壊すことなく国際的な観光基地をつくるとすれば、このマナン盆地しかない」と、歩きながら、熱っぽく夢を語りかけてくる。私は、自然と人間の調和のとれた関係というのは、往々にして看板倒れになる。住民が、主体的に参加する仕組みをつくらないと、結局は失敗するのじゃないか、と持論を述べる。ヒマラヤの高峰に抱かれた、雪の谷間の道の上で、会話は大いにはずんだ。

七時にチェックポストに立ち寄る。われわれは、今年四四／四五人目のトレッカーだった。ネパール航空の事務所で、カトマンズと交信するが、積雪多く、離着陸不能のため、飛行機を利用する道は閉されてしまった。残るはヘリコプターをチャーターする他帰る方法はないが、今日は空いていない。明日、ヘリコプターを飛ばすべく、最善を尽くすとのこと。宮原さんも私も、本当のところは、どんな無理をしても、今日中にカトマンズに帰着していなければならないのだが、どうしようもない。腹をくくって、部落の対面にある小さな山に登りに出かけた。一時間ほどの散歩だったが、新雪のなかを、膝上までのラッセルを楽しみながら、地図とにらめっこで、周囲の山々を観察した。高度にして一〇〇メートル程登っただけだったが、アンナプルナIII峰の迫力がより強烈だった。ジャコウ鹿の親子連れ五頭の群れを見つけた時は何か胸が踊った。

下山すると同時に、予想もしなかったネパール陸軍のヘリコプターが飛来。カトマンズに戻り、充実した今回のトレッキング行も、あっけなく終わってしまった。但し、雲が多く、アンナプルナII峰を見ただけで、マナスル三山は何も見えなかった。パイロットがけげんそうな顔をしていたのが不思議だったが、帰着後、宮原さんの会社の仲間が、私を病人に仕立てて、ネパール陸軍にヘリコプターでの救出を要請したことを知り、ようやく得心がいった。

タスマン氷河の山々

有賀　盈

一九九〇年のクリスマスの前後十日間を利用して、単身赴任先のシドニーからタスマン氷河の山登りに行って来た。二十年以上前にメルボルン駐在時、マルテブラン峰を登った思い出があり、是非再訪したいものと思っていた。十二月二十三日、マウントクックビレッヂで、ガイドのマーティーと落合い直ちに装備の点検調達を行なう。随分と物々しい道具をズシリと与えられる。夕方やっと風がおさまり、小さな軽飛行機で出発。途中クックやマルテブラン等を眼下口真近に見ながらスリリングな飛行三十分で氷河の源頭近くの雪上に着陸。ケルマン小屋はタスマンサドル（二四〇〇m弱）の断崖上にあり三〇分程の登りであった。小屋からの眺めは、北の方に右からエイルマー（約二六〇〇m）、ホッホシュテッタードーム（二八〇〇m）、その奥にエリードビューモント（三二〇〇m）、更に左手にグリーン（二八五〇m）、ウォルター（二九〇〇m）等が優美な姿で並び、更に左手に氷河に沿ってミナレット（三一〇〇m）デラベーシュ（三〇〇〇m）が続き最後にダンピア（三四〇〇m）、クック（三七〇〇m）の北東面が雄大に聳えている。

此の夏はニュージーランドは冷夏との事でそのせいか、山も天候不順で一週間滞在中晴天は二日半のみ。あとは吹雪で南からの強風が恐しい音をたてて小屋を揺がすので眠りを妨げられた。十二月二十五日昼から晴上って来たので二時過ぎエイルマーに向う。所々開いたクレバスを越える時に用心する他には難しい事もなく一時間半で頂上に着く。又ガスが出て来たので稜線伝いにホッホシュテッタードームに登るのをあきらめ来た道を小屋に戻る。十二月二十八日、今朝は星が輝いているのでエリードビューモント迄遠出出来るかと思ったが昼頃には崩れそうとの予報の為、ホッホシュテッタードームに決め五時小屋を出発。小屋から北西にスロープを下りタスマンサドル小屋を過ぎてから大きく右手に登りドームの西稜に出る。風もなく引締った雪をどんどん登る。六時過ぎマーティーの声で振返ったらすぐ眼の前にクックの頂上が朝日に輝き始めた所だった。マルテブラン、グリーン、ワルター、ビューモントも次々と輝き始め、しばし美しい眺めに時を忘れた。稜線の上部はかなり傾斜がきつくなり、最後の一〇〇mは見事なナイフリッヂで快い緊張感を味わいながら九時十分頂上着。頂上から遠く鈍く光るタスマン海までの広大且つ峨峨たる山並みを存分に楽しんだ後エイルマー側に東南稜下り十一時過ぎ小屋に帰着した。

その後二日がかりでビレッヂに下りホテルのバーで久し振りの酒を飲み、夕日次に月光に光るクックを飽かず見上げ乍ら、来年はあの頂上に立とうと、心に決めた。

スウェーデン最高峰ケプネカイセ

原　博貞

ストックホルムに赴任し最初の夏を迎えましたが、現地スタッフが次々に長期休暇をとる中、なんとなく休みそびれ、気がついたら八月も終りというお粗末さで、九月に入ったら四～五日休んで、北緯六十八度のスウェーデン最高峰ケプネカイセに行く事にしました。九月三日～四日にかけキルナ地方では雪混じりの嵐となり被害が出たというニュースがあり、貧弱な夏山用の装備と軽登山靴では無理かなと思いつつ、ま、今回は行くだけ、眺めるだけでもいいやと、家内を道連れに飛び出した次第です。ストックホルムから、ルレオでプロペラ機に乗り換え計二時間半、で鉄鉱露天掘りのキルナです。申遅れましたが九月五日です。空港に降りると風の冷たい事、あわててタクシーで町の山道具屋へ行き耳おおいのついた帽子を買い車で約一時間出発点のニッカロクタに行きます。白樺は黄色に色付いていますが流石に細くねじれて高さも二～三米止りで気候の厳しさを偲ばせます。今日は登山基地、ケプネカイセフヤールステーション迄十九kmの行進です。ラドユーヤベリ湖（川とも湖とも判然としない）とラドユーヨッカ川の左岸に沿って約十五kmの尾瀬の様な温原が拡がり、至る所に木橋が架けられています。下生えが紅葉している中、苔桃、ガンコウラン、黒すぐりが香り高く実っており道々つまみながらのそぞろ歩きは最高でした。大きな崖の末端を回り込むとモレーンが氷河の舌端状に盛り上りはるか上のサイドモレーンにロッジが見えます。このロッジが又驚異です。レストラン、バーのあるメインとサウナ、洗濯、乾燥室のあるロッジ、宿泊用の自炊用台所付ロッジに分かれており勿論暖房、シャワー、水洗トイレ付で台所は鍋フライパン食器全てありです。サウナは三十人は入れる立派なもので毎日楽しみました。料金は一泊二食付きで八千八百円、しかしサービスを考えると割安です。

スウェーデンとノルウェーを分ける山脈は一般的にスウェーデン側は女性的な丸い山と云れておりなだらかな曲線をイメージしていましたがケプネカイセはいくつかのカールと懸垂氷河を囲らしたアルペン的なシャープな山でなかなか魅力的です。小屋から片道八時間、往復十四時間とされており既に新雪が降り氷結している中で急変する天候を考えると今の装備では（特に軽登山靴が雪に弱いのは前年家内をつれて五月連休の南八ヶ山縦走でわかっていた）まず無理とは思いましたが行ける所まで行って見ようと皆寝静まっている六時前に小屋をスタートしました。薄暗い中、谷の入口を見落としてしまい一般トレッキング用の道を辿って途中でミスを気付きましたがこの氷河痕沿いのルートはあまりに氷河地形を忠実に残しており楽しくこの日は氷河の反対側を見る事に決めました。ケプネカイセの西の山シンギヴェーグを回り込むと北からの烈風がどっと襲いかかりますが、流石に北極からの風は冷たく、セーターの上にゴアテックスの上下を着込んでも寒く休む気にもなりません。巾は一K米強でしょうか、所々に氷河湖に見える小さな緑色の湖もあり、下の石を除いたら氷が出てきても何の不

思議もない雄大な地形でした。源頭迄十K米、更に反対側に下り北側の白銀に鈍く光る山々を眺めて帰路につきました。往復二十五K米は歩いたでしょう足中豆だらけ、ほとんど休めないので大分バテましたが帰ればサウナです。バイキングの子孫達と裸のつき合いをする事になりますが、いくら長いものをぶら下げていても、こちらはびくともしません。何しろ十人が十人、赤ちゃんと同じく先っぽまでの皮かむりですから。さて、登山路は帰路確認しましたがけっこう長く、稜線にでて、千七百米のピークに登った後、三百米下り、登り直しで頂上です。天気が保つという前提で頂上が十二時、逆算して千七百米のピークに十時迄に着ければ、頂上に向う事に決めて寝ました。

明けて九月七日、残念でした。初日からパッとしない天気は悪化の一路で雲高は下り、時々小雪が舞っています。半分諦め乍らも弁当を作り又も寝静っている小屋を出ました。ケプネカイセ山群に囲まれる大きなカールの入口は狭い谷で、左岸の急な捲き道を辿るのですが、寒いし、気はせくしでどんどん登り、カールに着くと、右手は青氷の氷河がぶら下り正面は頂上、左手は稜線に続く雪の急斜面でこれがルートです。カールを横切らなければならないのですがこれが大変な骨折で、カールの底を流れる沢山の流れが急に凍ってカンカンの氷面になり新雪は風に飛ばされてついていない為ツルツルになっています。あっちこっちウロウロしてやっと稜線に続く雪面に出ました。心配していた通り固くクラストしており、軽登山靴のキックでは先っぽが少し食い込むだけです。登れない事はありません。後に続く家のオバハンはちゃんとした山靴をはいており登ると云えばハイハイとついてきます。時間もまだ八時四十五分、稜線迄二十分でしょうから千七米ピークには十時前にかるく着けます。しかしもし吹雪になったらという危倶感が外せない悪天候ですから、どこかでビビって引返すでしょう。それなら絶対安全に引返せるここでやめよう、ズルズルやって後悔した若い日の反省もあり、明るく今回はここでおしまいと宣言しました。オバハンも嬉しそうな顔をしていました。休む所もなく、ドンドン下るうち、やっと登ってきた二人組に会いました。「どうした、寒いのか」と聞くから、「それもあるが、靴が雪に向いていない」と答えたら成程と云っていました。彼等のはすねの中まで来るロングブーツで、二重構造の頑丈なもので日本の山靴とは全く違います。結局このあやしげな天気は一日保ってしまい本格的に荒れるのは翌日の昼からでしたが、入下山全てこみで予備日を入れて四日間楽しめる山を発見出来た事で我々夫婦は全く満足しました。景観が素晴らしいのもさる事乍ら、小屋での滞在を楽しめるというプラスα、レストラン、バー、サウナ、台所、快適さの中で自然を楽しむいかにもスウェーデンらしい経験が出来たからです。車の入る所から十九K米、日本なら槍沢位でしょうか。そこにこれだけの設備がどうすれば作り維持できるのか。考えさせられますが、今月の半ば過ぎればここもクローズされます。

わざわざ、ケプネカイセに登りにくる日本人はいないでしょうが、山小屋の経営者に「こういうやり方もあるのだよ」と見せて上げたくなる今回の経験でした。山は来年登る事にします。皆様も頑張ってください。

お薦めの山・メッテルホーン

石　弘光

ツエルマットの街角にたたずみ、マッターホーンを仰ぎ見て、顔を一二〇度ほど右へ向けるとそそり立つ山間に二つの小さなピークがみえる。その奥の方が、メッテルホーン（Metelhorn）である。山の高さは三四〇六米だから、日本の北岳、奥穂などよりかなり高い。今夏（一九九一年九月六日）、この山に登ったがいくつかの理由から、是非お薦めしたい山である。

まず第一に、メッテルホーンの山頂に立つと一〇数座ある四〇〇〇米の山々をすべて眺めわたすことができる。とりわけツェルマットから見られないワイスホーン（四五〇五米）のすばらしいピークを眼前にできる。第二に、ツエルマットから高度差一八〇〇米あるが七～八時間で往復できる。何よりいいことは完全に夏山スタイルで登るとができ、ピッケル、アイゼンの類いはまったく不用である。第三に、他の山と違いケーブルなどの乗物にたよらず麓から、文字通り自分の足で山頂まで辿りつけることで大いに充実感を味える。そして第四に、より高いピークを目指すときの恰好のトレーニングになることである。とりわけ日本から出発し短期間で本場アルプスに挑戦といった際、時差ボケの体調を整えるのに最適な山といえる。

今度、欧州で三つほど出席せねばならぬ国際学会があった。開催日の合間を利用して、かねてあたためていたアルプス登山が実現することになった。仲間は、一橋の山岳部にも居たことのあるニラード・モルテニー君（現在、ボッコーニ大学講師）で、九月早々にミラノで落ち合った。まず目指したのが、モンブラン。イタリー側のクルマーユから、オーギュ・ド・ミニの山小屋に入り翌朝三時に出立を図ったが、吹雪で断念。日程の関係もあり、ツエルマットに転じることになった。

メッテルホーンは、ツエルマット滞在、最後の晴れわたった日、心ゆくばかり楽しんで登ってきた。前日、テオドール小屋を朝三時に出登、ブライトホーン（四一六五米）を登り、氷河を横切りポラック（四〇九一米）とキャスター（四二二六米）のコルまで達して帰ってきたが、一夜寝て疲れもすっかりとれていた。

出立の朝、ホテルでチェック・アウトの日を間違えごたごたがあり、一〇時と遅くなってしまった。しかし往復八時間とみても、夕食までに帰れると出発することにした。街端れから、山の中腹にみえるエイデルワイスのヒュッテを目指す。やにわに曲りくねった急登の連続だが、道はよく途中に滝もありさして苦にならぬ登りである。ヒュッテまで小一時で着き、他の登山客にまじりモーニング・ティとしゃれこむ。それから約一時間、お花畠の急登の連続をした後、牧場のあるツリフ（Triff）に到着する。ここまでくると、モンテ・ローザ（四六三四米）、リスカン（四五二七米）の方面の山々が、雪をいただいて雄姿を現わしてくる。

ツリフで三〇分ほど大休止、昼食をとる。ここにあるヒュッテのお薦め品が、果物入りのヨーグルト、ビルケルムースリー（Birchermuesli）である。ここで採れる新鮮なヨーグルトだけに味は抜群である。ツエルマットから、二時間かけこのヨーグルートを食べにくるだけでも、十分に価値はあるだろう。

ツリフを出ると、道は牧場の中を通り気持ちのよい草付きの急登となる。左手の谷の奥に四〇〇〇米を超えるガベルホールの三つのピーク

がそそり立ってくる。道は次第に岩場が多くなり、時折湿地帯にもぶつかる。朝早く出発した人々が下山してくる姿にも、数多く出会うことになった。マッターホーンを背にして登るにつれ、次々と四〇〇〇米級の山が見えてくる。ドーモ（四五四五米）やストラルホーン（四一九〇米）なども、眼の中に入ってくる。空はあくまで晴れわたり風もなごやかで、前日の朝寒さでふるえながら氷河をトラバースしたとは大違いである。

トリフを出て、丁度四五分ピッチを三回で午後三時に、メッテルホーンの頂上に達することができた。最後の一ピッチは、ワイスホーンの優雅な山姿を背に、崩れやすい岩の積み重なった稜線である。頂上は一人がやっと馬乗りになれるぐらいの場所しかない。一寸、首を出すと眼下にツエルマットの街並みを遠望できた。メッテルホーンからの三六〇度の展望は、さすがにすばらしいものがあった。マッターホーンを背景に、万歳のスタイルでモルテーニ君に写真をとってもらう。また頂上近くの切り立った岩角で長々と寝そべっていたユーゴ人のおじさんに、二人の記念写真をとたのむ。

一時間ほど頂上に滞在、ゆっくりと下りにかかる。アルプスの高峯を眺めながらの下山は、楽しいものであった。しかしアルプスに来る前、日本で痛めた膝（農鳥岳の下り大門沢で膝をひねる）がいたみ出し、ピッチがすっかりおちる。モルテーニ君をだいぶ待たせたが、それでも六時少し過ぎにはツエルマットのホテルに無事帰ることができた。

その夜のワインのおいしかったことは云う間でもない。外に出てアルプスの夜空の星を眺めていたら、昼間に腰を下したメッテルホールの頂がくっきりと浮かんでいた。

中国・四川省三題

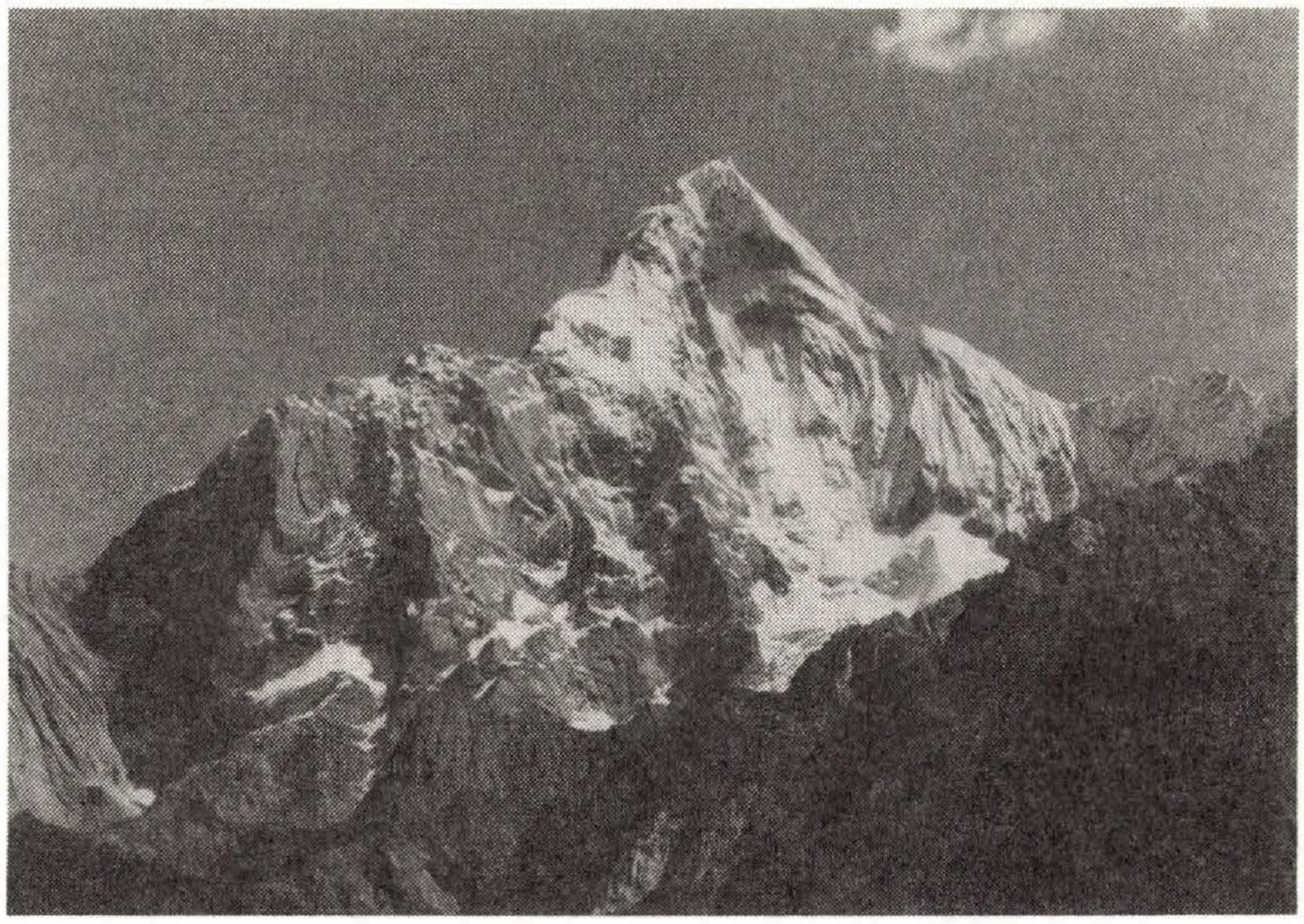
中村　保

三国志の蜀の国の事跡よりも山に関心を持つ輩にとって四川省は垂涎の土地である。今は行政的に併合されているかつての康西省は東チベット・カム地方であり、現に住民の大半はチベット人である。成都から西へ二郎山を越えて大渡河におり立てば、その先は歴史的にみればチベット文化圏であった。四川（康西）の山々は谷深く、金沙江及びその支流が北西に山脈を分断して延び、交通は困難を極める。成都からラサに至る川蔵公路は幾つもの四、五千米の峠を越え車で一週間を要する難路である。この地域の雪山はミンヤコンガが抜きんでて高いが、六千米級の山々が無名峰を含め相当あり、五千米クラスとなると存在すら注意を払われていない山が幾多残されている。中国づいて以来、雲南と交互に四川にも入る機会をとらえて三たび足を踏み入れたので、あらましを紹介したい。

一、四姑娘山（一九九〇年七月）

商用で重慶に行った帰りに成都に立寄り四川登山協会にアレンジを依頼し、四姑娘山（六二五〇米）の間近まで僅か二日で往復することができた。四川の山々の中ではコンガ山と同じくアクセスが大変便利で、しかもその山容は秀麗、登攀意欲をそそられるピークである。一九八〇年に同志社隊が初登頂も果している。

七月七日（曇）例によってガイドつきのランドクルーザーで成都を発った。一日の行程は約二四〇km、山道なので可成りきつい。盆地から

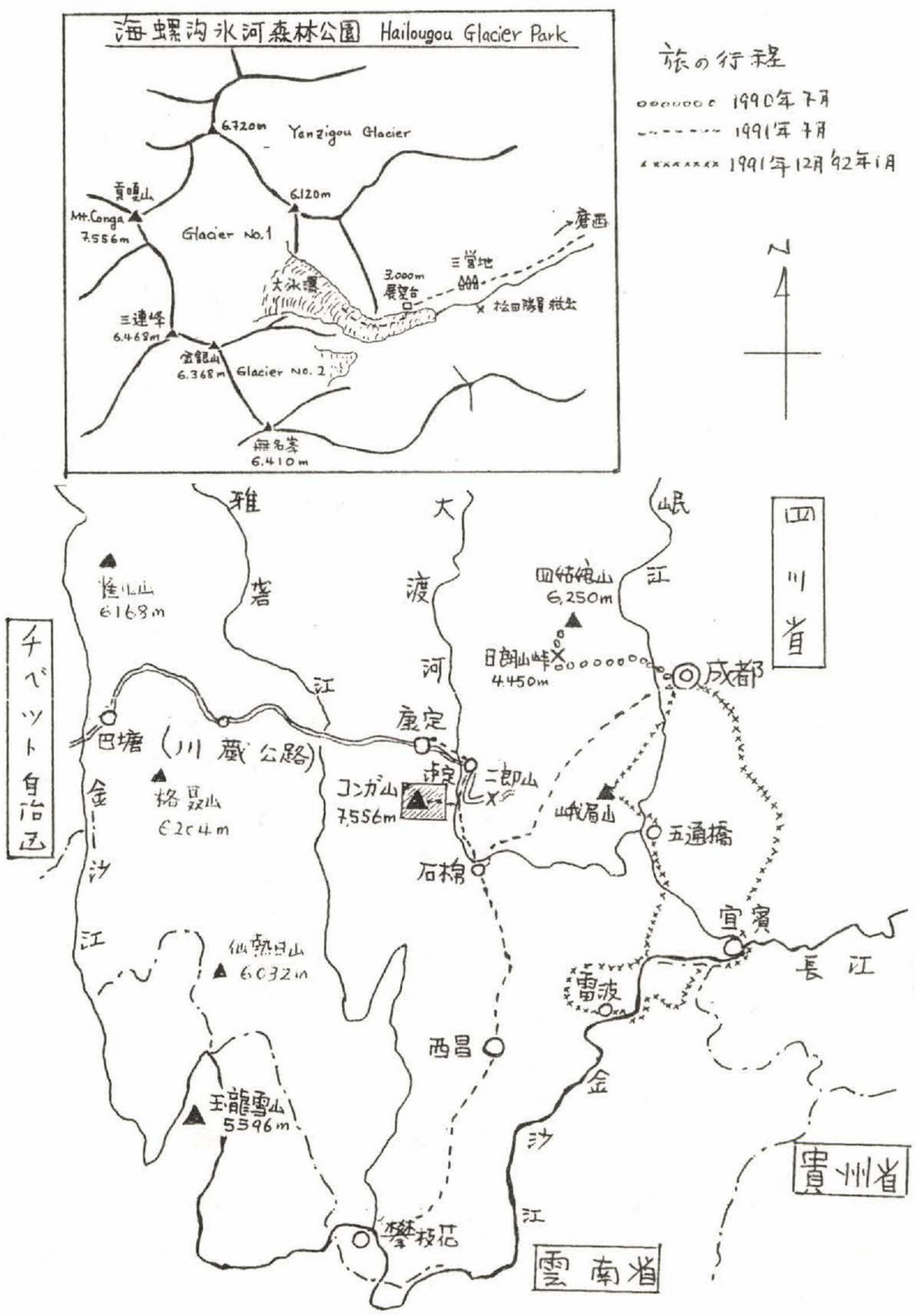


四姑娘山 6,250m

山間に入り岷江の支流で奥多磨渓谷を思わせる美しい谷を遡ること半日でパンダ保護区で有名なオーロン（一九〇〇米）に着く。このあたりに約二〇〇頭ぐらいのパンダが棲息している由で、一二頭が完備した施設の中でリハビリ中であった。飼育係は日本にも行ったことがあり、世界の動物園の供給基地にもなっている。

オーロンから渓谷をしばらく進んで左岸の山腹ぞいに一気に高度を上げる。四〇〇〇米前後で森林限界を抜け、なおも道は草の斜面をゆるやかに登り日郎山峠（四四五〇米）の分水嶺を越える。周囲は五千米弱の名も無い山々が重畳と続き、峠の北側は上部が圏谷状の谷が広がり、ヤクがのんびり草をはんでいる。その正面に五五〇〇米前後の無名の山群が誘うように聳へている。ガイドに聞いても興味を示さず知らないと言う。ゆるやかな谷を下り、左岸の山稜をまわりこんだところで視界いっぱいに四姑娘の雄姿に突如現われ息を呑む。ピラミダルな鋭角的な美形に見とれシャッターを押し続けた。夕暮に宿場の村日隆（三〇〇〇米）に着き、長距離バスの客と一緒に旅宿に泊る。夕食の時間

長江（揚子江）上流



に間に合わず文句を言ったところ、庭でやにわに豚を一頭屠り料理してくれたが、悲鳴が耳から離れず食はすすまなかった。

七月八日（晴）雨期にはめずらしい快晴の夜が明けた。ガイドもこんな好天ははじめてと言う。早起きして四姑娘の左側の谷を午前中時間の許す限り登ることにしてガイドと勇躍出発する。菜の花の盛りで、清流がおどる放牧道を進むにつれて主峯の南面が圧倒的に迫ってくる。左稜の岩稜は側壁を拡げクライマーなら大いに食指を動かされる見事なもの。約三時間のハイキングを満喫して道が山陰に入るところから引き返した。晴天も午前十時頃までで、雲が出はじめ日隆から帰路についた正午過ぎには雨模様となった。ガイドの言う通り本当にラッキーなタイミングだった。再び来たコースを戻り四四五〇米の峠を越え雨の高山をひた走りに下り、翌日の飛行機を逃さないため一路成都へ急いだ。四姑娘は手近な山、気軽にトレッキングに出かけるのに格好の対象だと思う。

二、長征の道とミンヤコンガ

（一九九一年七月）

雲南に近い金沙江の谷間の斜面に位置する攀枝花製鉄所で仕事をした後、長征のルートをたどり海螺沟（ハイルウコウ）氷河森林公園に入りミンヤコンガ（七五五六米）を望見し、さらに康定（打箭泸）まで足を延ばして東チベットの雰囲気に触れようと欲張ったプランをたてた。

一九八七年の天安門事件の際いち早く北京乗込みテレビでリポートした米国のジャーナリスト、H・ソーリスベリーの名著「長征・語られざる真実」に魅せられてこの計画を思いたった。革命世代を活写し、壮大なドラマを一大叙事詩に仕上げたノンフィクションの白眉である。歴史と山の組合わせと言うチグハグなテーマに自己満足して旅立った。行程は図に示すごとく、成都を起点にして攀枝花・西昌・石棉・海螺沟・泸定・康定・成都と一〇日間の車と馬の旅となった。

七月二二日（雨）成昆鉄道が大雨のため不通となったので、先ず空路西昌まで飛び車で攀枝花に入る。二日間製鉄所での用件を済ませいよいよ本番の期待に胸がふくらむ。攀枝花製鉄所は文革の初期に毛沢東の号令一下成昆鉄道とともに突貫工事で完成されたもので、かくも山奥に年産二百万トンの一貫製鉄所が存在することは想像もしない驚きであった。

七月二四日（晴）長征ゆかりの街会理を経て金沙江の支流沿いに西昌に入る。西昌は開けた豊かな土地で、かつては大源山のイ族の中心地であったが、イ族は山間に追われ漢族が支配的で現在はロケット発射基地として知られるところである。風光美しい湖のほとりの賓館に泊る。

七月二五日（晴）この日は長征の道をたどる。青くかすむ四千米級の大涼山を右に見つつ緑濃い谷を成昆鉄道と平行して進み、二五〇〇米の峠を越え大渡河のほとり石棉に出る。石棉から西岸が険岨に迫る大渡河の左岸を落石におびやかされながらランドクルーザーで先を急ぐ。右岸は紅軍が国民党軍と死闘をつづけ、味方につけたイ族に助けられ苦境を切り抜けたところである。真冬の行軍の厳しさは想像に余りある。泸定の手前で右岸に渡り海螺沟の入口の磨西（六四五米）で車をおりる。ここまで一〇時間を要した。日が長いので一営地まで馬で入る。氷河公園の管理所で入山許可をとり、馬を二頭やとって夕刻一八時にガイドの馬悦さんとともに出発。チベット馬は貧弱で力なく乗っていて心配だがムチを入れる。谷筋は上越の山の植生に似ている。二一時一営地（一〇八〇米）着、中国式のホテル風の宿舎に泊る。

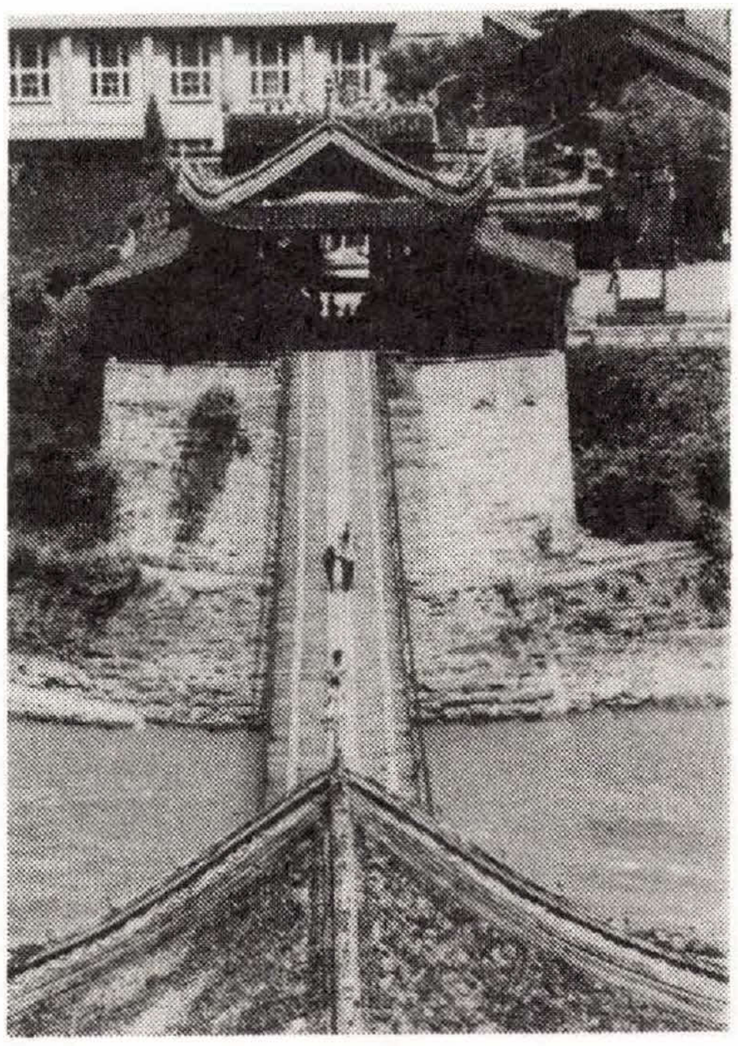
七月二六日（曇）左岸の原生林の中を登る。針葉樹が多くなり上るにつれて日本の南アルプス的な谷の様相に変る。昼過ぎ二営地（二五八

○米）着。温泉が湧いており、露天風呂に馬さんとゆっくりひたる。白樺の巨木が現われはじめる。時折下山する観光客の馬の一行とすれちがう。上るにしたがい谷が開けて上高地的風景に変る。田代池によく似た静かな湿地を通って一三時三営地（二九四〇米）に到着。こぎれいなバンガローが並ぶ氷河見物のベースとなっている。ここから先は徒歩で氷河展望台（三一九○米）へ。ミンヤコンガ西面の氷河が大氷瀑となりその末端が二八五○米のところまでおりてきている。遭難した松田隊員が救出されたのはこの末端の少し下のところだった。生憎天気は崩れ、六四○○米クラスの前衛峰の裾あたりまで厚い雲がたれこめて視界きかず不運をかこつ。

七月二七日（曇・雨）天気は回復しないがもう一度展望台まで登る。上部の大氷瀑地帯に近づくべく、いったん岩屑におおわれた氷河に下り立ち、しばらく登るが雨が強くなってきたのであきらめて引き返した。四姑娘の時の好天とは反対に悪いめぐり合わせであった。それでも時折雲間に三連峰（六四六八米）無名峰（六四一○米）の鋭い山容をかいま見ることはできた。がミンヤコンガには見参かなわず仕舞に終った。雨の中を馬で帰路につく。雨上りの急峻な山腹に幾条もの巨大な滝がかかり、霧が山稜を去来する夢幻的で絵画的な光景を楽しみつつ磨西に戻った。待たせていた車で泸定（一三八○米）を経て康定（二四九五米）に夕方到着。

七月二八日（雨）康定から川蔵公路を少し西へ行こうとも考えていたが、雨のため中止せざるを得なくなった。康定は打箭泸の名前でかつて康西者の省都であり、東チベット・カム地方の東端の要衝の街で、多くの深隊家が行動の要としたところでもある。往時のカム地方の街並と風情を期待したがここでも当が外れた。中心部はすっかり新中国風、即ち他の都市と同じように、コンクリートの箱状の建物が多く、歴史と文化とは縁のない画一的な町になっていた。雨の降りしきる中を泸定に戻る。ところが前夜の大雨で道路が決壊し立往生。近在の村人や人民解放軍兵士が修復にあたったが、丸一日足留めされてしまった。夕刻泸定に泊る。

七月二九日（曇）難所である二郎山（三四○○米）越えの道が崖崩れで不通となり、一日停滞を余儀なくされる。雨期の四川は避けるべきとの教訓を身をもって体験した。泸定の大渡河にかかる「泸定橋」は一七○五年に建設され、その特徴ある一三本の鉄の鎖で支える吊り橋の構造と、歴史上興亡の舞台となった名所である。歴代のダライラマが数ヶ月かけてラサより朝貢のため北京に上ったときもこの橋を渡りシナ領に入っている。太平天国は泸定橋の戦で最後の幕を閉じた。紅軍はこの橋の攻防で国民党軍を奇襲戦法で破り長駆延安への活路を開くことができた。橋そのものと両岸の建物はよく保存されており、観光資源としても価値がある。


泸定橋

七月三○日（曇）二郎山の崖崩は復旧のめどがたたないので、遠廻りながら石棉経由のルートをとる。十三時間で成都に帰着した。最後にガイドの馬悦さんのことを記しておきたい。成都電子技術大学英文科の二年生で二○歳。四川美人である。アルバイトで来てくれた。冷静で礼儀正しく、向学心旺盛、知的で頭の良い娘さんである。共産主義には懐疑的で世界の事情に強く関心をもっている。英語は基礎がしっかりしている。将来の成長が楽しみである。「上海

の長い夜」の著者のように優れた知性と強靭な精神力、思いやりと公正な判断力を持つ人材に育ってもらいたいと思っており、これから先機会をみてサポートしてゆくつもりでいる。

三、峨眉山から雷波へ

（一九九一年一二月―九二年一月）

年末年始休を無為に送らないため三たび四川に入った。山岳地帯は雪で道路が閉鎖されるので行けるところは限られる。高名な峨眉山は宗教的な山で抹香くさいが一度は訪れてみたい所ではあった。また、いつか熟読したフランスの軍人探検家ドローヌの「シナ奥地を行く」の口口族（現イ族）探検の記述の中に雷波の美しさが書かれていたことが印象的だった。英語版ガイドブックにもこの地域の壮観なゴルジを形成する場子江上流の特異な風景を紹介にも刺激され、生来の未地への憧憬が雷波へ足を向けさせることになった。

十二月三一日（曇）寒くどんより曇った成都を出発、峨眉山に直行する。相変わらずトラック、自転車、人の多い交通規則に無縁な街道を警笛を鳴らしっぱなしで走る。成都盆地は中国の穀倉地帯、肥沃な畠に一年中緑の絶えることがない。日本の昔の農村風景に似ている。が、「太陽がでると犬が吠える」と言われるほど一年中曇りの日が多い。とりわけ冬場は霧がでて滅入る気候である。冬のロンドンのようなところだ。

成都から峨眉山山頂まで六時間ほどで行ける。二五〇〇米ぐらいのところまで車で登り、そこからロープウェーで一気に山頂に立つ。雪のちらつく霧の中をゆっくりドライブ、ロープウェーに乗替えて濃霧の中をただ高度を上げる。中国にしては快適でスムーズ運行に感心している。と、頂上の下二〇〇米ばかりで突如雲海の上にとび出した。何も見えないことをあきらめていただけに感激ひとしおだった。夕陽に映える西側の山なみ、輝く山頂の寺院に感動する。夜は山頂のホテルに泊るが、火の気が全然なく寒さにふるえる一夜を過した。明け方はマイナス一〇度ぐらいにまで下ったろう。それでも三十人ぐらいの泊り客が来ていた。

一月一日（晴）八時半日の出。元旦のご来光を拝む。峨眉山は東面が山頂から数百米の断崖となって切れ落ちている。自殺の名所とも聞く。雲海上の日の出は素晴らしいの一語に盡きる。前年の台湾の阿里山で迎えた玉山の肩から上る日の出に匹敵しよう。かたや西側は遥かかなたに厳冬のミンヤコンガとその衛星峰の山群がモルゲンロートに染まる姿にしばし手足のしびれるのも忘れた。一九九二年は良い年になろうことを確信して山頂を辞し次の目的地に向った。峨眉山を下ってから大仏で有名な楽山を通り、この日は五通橋に泊る。長江四大支流の岷江と大渡河の合流点にあり四川の西湖と言われる水辺の町である。川魚をすすめられるが味は四川風、山椒の辛さに舌がしびれる。

一月二日（曇）濃霧の中を出発。昼頃晴れ間が出たが日差しはにぶく空気の透明度は低い。雪道の峠を越えいったん金沙江のほとりに下ってから再び山間に入る。二つ目の峠を越えて一気に金沙江に下る。闇のなか断崖に沿った危険な道をとばして二〇時雷波着。一一時間の強行軍だった。雷波について再びドローヌの一九〇五年の前述の旅行記を引用する。「口口国（イ族の半独立国家）を東から見張っている防壁のあるシナの都市雷波鎮に達した。……眺望はシナ全土でも最も美しい。かなたに恐しげな龍頭山あり、脚下には青河（金沙江）の蛇行する深淵あり、前方には人影の多いキン・ティの台地あり……」金沙江が台地をえぐって数百米の断崖をつくり、台地の上には木立や棚田と村落が点在する。雷波は台地の上、河床から七〇〇米ほど上に位置している。

「雷波」近くの金沙江

二日間雷波に滞在した。かつて山地の半独立国で独自の文字を持つイ族のテリトリーの外縁部に雷波はあり、県の人口二二万人のうち三分の一以上がイ族である。ここではイ族は大手をふって街中を住来している。太平天国の乱の末期、石達開の軍を苦しめ、長征のとき、義により同盟を結んで紅軍を援けた勇猛をもって鳴るイ族である。が経済的には今は漢人に従属し、より貧しい暮しに甘んじており、大半は大涼山の奥深いところに追い込まれている。雷波の街中では南米インディオのポンチョに似たマントを着たイ族を多く見かける。イ族は人種的には漢族や他の少数民族と異り、大柄でアラブ系的な彫りの深い顔つきをしている。学者の意見を聞いてみたいところである。

雷波の市街地は人口一万人、農業以外に産業らしいものはないが、じゅん菜の産地で、こんな奥地に日本から買付けにくると聞いて驚いた。商売なら地の果まで出かける日本人のたくましさを再認識させられた。雷波はまだ外国人には開放されておらず特別の許可が必要であり、行動も公安の人の監視つきである。豊富な種類の野菜が並ぶ市場を見物したあと公安の人の案内で金沙江に出かける。数百米の断崖の上の台地に水力発電所があり、水田がある。ゴルジュの急流を遅々として船が上流に向う。怒江(サルウイン河)大峡谷とは違った趣を呈している。夜はイ族の出入りするレストランで盛大に夕食。いつもながら辛さに閉口しながら白酒の杯を重ねる。カラオケ出進もこんな辺境にもんでいる。中国人はダンスとカラオケが日本人以上に好きらしい。招待所で行われていた結婚披露宴によばれ、花嫁からダンスに引っぱり出されて弱った。

一月四日(晴)帰路につく。金沙江にかかる吊り橋を渡って雲南側の河岸に移り、河沿いに進む。相変わらず雄大な峡谷が続く。が下るにしたがい船の住来が増えてきた。山間の地での河川輸送の効果は大きい。河岸の平坦地には集落が現われる。大きな断崖の迫る屈曲点で道は雲南側を上り大きく迂廻する。風景、家の造りが少し変る。雲南風と言うか苗族のテリトリーに入ったようだ。再び金沙江のほとりに出ると、そこから先はゆるやかな丘陵地帯となり河幅も拡がり大型の船が往きかう。夕暮に四川省第四の都会で長江上流の河川交通の中心である宜賓に着く。ここは名酒の「五稜液」の生産地でもあり重慶につぐ港町でもある。あとの行程を考え自貢まで行って泊る。翌日幹線道路を成都まで帰り着いて一週間の気ままな、しかし結構面白い旅を無事終えることができた。ガイドをしてくれたプレーボーイの赵さんにはいろいろ便宜をはかってもらったこと感謝したい。

初秋の甲斐駒ケ岳

西牟田　伸一

今回の山行は8月の半ばに思い立ったものである。昭和四十五年九月二日、金子晴彦と私は赤石沢奥壁において橋本明君（二十二歳）を失っている。今年はそれから二十二年目にあたる。つまり、私の人生の節目とも言うべき遭難事故の前と後がほぼ同じ期間になった、と言う事である。

現役が今年三度目の夏合宿として黒戸尾根経由南アルプス縦走を企画していたので、それに合流するのが最も安直かつ有意義と思われた。しかし、たまたま、前の職場で長い間世話になった女性の結婚披露宴に出席する約束をした日程とぶつかってしまい、今回の山行は学生に一週間遅れざるを得なかった。

倉知さん、加藤、前神、引地、浅田に黒戸尾根経由甲斐駒、仙丈、北岳の縦走計画をFAXしたが、別の山行計画、海外出張、或いは引地の場合インドヒマール・ホワイトセールへの中村家遺族同伴の追悼登山直後による多忙で、結局同行者はなしと言う事になった。女房が「同伴者なしの登山はダメ」と言い張るのを、三年前の経験からして、黒戸尾根のこの時期は登山者があふれていると説得し、何とか黒戸尾根経由甲斐駒一泊二日の許可を得た。しかし、会社には十四日の休暇も申請してあり、何とか十三日の夕方までに電話連絡出来れば延長可と言う事になった。

十一日の夜は早めに帰宅、準備万端を整え、駅前の飲み屋にもご挨拶してひばりヶ丘発最終の武蔵境行きバスに乗る。立川で乗った最終鈍行は三年前程混んでおらず、乗車と同時に一定の面積を確保、目覚めれば四：五〇。さては寝過ごしたか、と表を見れば未だ一駅前の日野春、本来の時刻表では四：四〇長坂となっていたが、幸いにも遅れたらしい。長坂駅前のタクシーを予約していなかったが、同じ単独行者2人と相乗りで無事竹宇駒ヶ岳神社着。

三年前は夏の無かった年で、8月以来振り続いた雨が九月の連休になっても収まらず、たまりかねた登山者が振りしきる雨の中、黒戸尾根にも長蛇の列を作ったものである。この時は、金子の仕事上の友人、田崎氏に同行願ったのだが、今回は氏の年令も考え、声を掛けるのを差し控えた。

神社境内で早々に朝食を済ませ、手を合わせて出発。快調に2ピッチで粥餅石の水場着。ただ、水量は僅かで一〇〇cc貯めるのに一分かかる。神社の境内に「七合小屋は渇水状態であり、神社で充分な水の準備を」との掲示があったのを思い出す。

息子から借りてかぶって行った野球帽の庇から一歩毎に汗が一滴づつ落ちる。更に2ピッチで五合小屋。遭難時に大変世話になった古屋義成さんがおられる。三年前はお会い出来なかったが、「今日は、西牟田です。」と言えば「オー」と答え、自分から一橋山岳部はどうした、金子はどうしてる、と聞いてくる。ひとしきり話した後、二年前の皇太子登山の話になる。皇太子はよく下準備をしてきたようで、古屋さんへの質問、対話は四十分に及んだと言う。昼飯どきになったので小屋を辞して、コーヒーを沸かす。沢山いた尾根道の登山者が殆ど登って行ったのを見届けて出発。

一時間で七合小屋着。お世話になった高木さんは二代目に主の座を譲られていた。少憩後、軽装で慰霊碑に向かう。三年前と全く同じ状態で、早速持参の焼酎、煙草、線香、蠟燭を手向けて合掌。嬉しかったのはレリーフ横のケルンの上に置いてあったサンキストのオレンジである。これは約一週間前に天羽君以下学生達が置

いて行ったものであった。思えば彼等にとって、今回の遭難碑訪問は、我々が現役時代にマチガ沢で合宿の度に山中健雄さんの慰霊碑に手を合わせたのとほぼ同様の行為である。

即ち、我々にとって二十二年も前に先輩が遭難したと言われても全く実感は無かったのである。何れにせよ自分が生まれた頃の先輩の遭難など彼等にとってもおよそ実感の乏しいものであったろう。しかし、私には彼等の残して行った物言わぬ一個のオレンジが無性に嬉しかった。（現役三名は光岳までの長い縦走を終え、十三日無事帰京）

針葉樹会の存在意義に疑問を持ち、卒業しながら入会を拒否する若手がいる昨今である。そう言えば黒戸尾根の長い登りの途中考えた。我々の遭難を知った諸先輩はどんな思いでこの苦しい登りに耐えたのだろうか。これまでのような一橋山岳部、針葉樹会の結びつきは徐々に希薄になって行くのであろうか。

慰霊碑の前に座り込み、八ガ岳方面を向いて持参した焼酎をチビリチビリやっていると何とも言えない至福を感じ、思わず時間が過ぎてしまった。

この慰霊碑の位置は意外に分かりづらく、二代目高木さんも二年前に偶然見つけたとかであり、一般登山者にはまず見つからないと思われる。天羽君には出発直前電話で場所を知らせたのだが、良くぞ見つけてくれた、と思う。会員諸氏に位置をどう知らせるかいろいろ考えたが、以下の説明ではどうだろうか。

1　橋本明君の茶毘をした場所

2　七合小屋から約二十分、高めの潅木が低めに変わり、急に視界が開ける所まで行くと行き過ぎ、それ　より二～三分下。

3　下から行くと右側に大きい岩があり、岩の上には「猿四彦命」の石碑がある。

4　岩の裏側を覗くとケルンが目につき、更に近寄ればその横に望月元会長の書により「往きかわん　時折りは　あの言葉　歓喜を絆に」のレリーフがある。

今回大量の線香、蠟燭を持参したので、余りをポリ袋に包み、ケルン裏の窪みの中に入れておいた。

七合小屋は当初宿泊客は少ないと思われたが、六時頃到着する無謀な単独行者もあり、超満員となった。

翌十三日は五時半起床。丁度富士の方向から日の出の見られる時間であった。出発は若干手間取ったが、富士、北ア、中央ア、八ツ、白根三山等の景観を楽しみつつ山頂着。下りは駒津峰、仙水峠コースを取り、小雨の中、北沢長衛小屋着。北沢は水量豊富で途中仙水小屋で飲んだ水は旨かった。長衛小屋に着いたのは十一時、ここから仙丈往復は充分可能であったが、折から振り出した雨の事、翌十四日に回すにしても、これと言ってやる事もない事、小屋の主人によれば十四日は平日の為広河原からのバスがない事等を勘案し、下山を決めた。北沢峠から広河原までのバスの出発時間まで一時間もあったので、スーパー林道を歩いて見る事にした。我々の現役時代、春山合宿で野呂川出合まで下り、野呂川を遡って、北岳まで縦走した時はこの道がなく随分時間が掛かった事を思い出す。途中、道路のわきの削られた岩が猿の顔に似ているな、などと考えていると、上方でガラガラと音がする。見上げれば真っ赤な顔の猿が私を見下ろしていた。野性の猿を見た経験はなかったのでビックリした。

突然現れた広河原の喧騒と車の多さに驚き、早速甲府行きのバスに乗る。何となく、女房との約束通り、その日のうちに帰る気がせず、途中芦安温泉でバスを下り、岩園館と言う旅館に泊まった。素泊り八千円と言う値段とサービスの悪さには驚かされた。二日間でたっぷりしみついた汗を流し、ホッとした。

この先何回こうした追悼登山を行えるか分からないが、自力で登れる限りは同行者を募って毎年九月に実行したい。

九月十二日(土) 0:40 立川発鈍行にて出発
6:10 竹宇駒ヶ岳神社を出発
8:00 粥餅石水場
9:00 刀利天狗
10:00 五合小屋着
11:00 五合小屋発
12:00 七合小屋着
13:00 七合小屋発
13:20 レリーフ着
14:00 レリーフ発
14:20 七合小屋着

九月十三日(日) 5:30 起床
6:25 七合小屋発
7:08 ヘリポート(八合鳥居)
8:10 甲斐駒頂上着
8:20 甲斐駒頂上発
9:20 駒津峠
10:05 仙水峠
11:05 北沢長衛小屋着
12:00 〃 発
12:47 野呂川出合
14:00 広河原着

会務報告

平成四年度総会は七月一日(水)夕刻より如水会館にて開催されました。

当総会にて審議・承認された。事項は次のとおりです。

1 平成3年度 活動報告

(1) 懇親山行はありませんでしたが、ホワイトセール追悼山行(九月十四、十五日一泊二日)、笛吹川東況(十月二六、二七日一泊二日)、中川孫一氏追悼山行(一二月八日)等が行われた。

(2) 会 合

(a) 評議会 三年六月一九日
(b) 総 会 三年六月二六日
(c) 新年会 四年一月三〇日
(d) 幹事会 四年六月一一日
(e) 評議会 四年六月二四日

(3) 出版物

(a) 会 報 第七七号、名簿発行
(b) 如水会報 投稿(特になし)

6 新旧役員対照表(案)

(1) 会長、副会長(平成四、五年度)

会 長 石原 脩 (留任)
福会長 高橋 治郎 (留任)

(2) 評議員(平成四、五年度)

	卒業年度	
岩崎 利一	十五	留任(予定)
松下 順吉	十九	〃
小林茂雄(議長)	十九	〃
樋口 洪	二二	〃
田中 一雄	二三	〃
笠原 広信	二四	〃
石原 脩	三〇	〃
高崎 治郎	三一	〃
山本健一郎	三二	新任↑甘利仁朗
上原 利夫	三三	留任
倉知 敬	三八	〃
加藤 正巳	四三	〃
松尾 信孝	四八	〃
加藤 博行	五一	〃
浅田 充	五二	〃
松田 重明	五三	〃
引地 真	五五	新任↑近藤 泰

(3)

幹 事	西牟田伸一(留任)
代表幹事	石丸 義男(留任)
総 務	河野 正(留年)

会　報　引地　真（留任）
　　稲毛　尚之（新任）→岡部晃和
山　行　浅田　充（新任）→前神直樹
学生担当　西牟田伸一（留任）
　　山内　太（留任）
保　険　河野　正（留任）

(4) 監　事
山本健一郎（留任）
佐藤　久尚（留任）

(5) 新人紹介（なし）

7 平成四年度　活動予定（案）

(1) 懇親山行
(a) 秋の山行（四年十月頃）
(b) 春の山行（五年三月頃）

(2) 会　合
(a) 評議会
(b) 総　会
(c) 忘年会
（近藤恒雄先輩の卒寿のお祝いを兼ねる）
(d) 幹事会（二回）

(3) 会　報（第七八、七九号）

以　上

平成３年度　遭難対策基金　収支計算書

単位：円

支　　出	金　額	収　　入	金　額
学生保険料	40,000	前年度基金有高	4,453,327
当年度基金有高	4,625,606	学生保険料（一般会計より）	40,000
		利　息	172,279
合　　計	4,665,606	合　　計	4,665,609

平成４年度　遭難対策基金　予　算　案

単位：円

支　　出	金　額	収　　入	金　額
学生保険料	40,000	前年度基金有高	4,665,606
当年度基金有高	4,865,606	利　息	200,000
		学生保険料	40,000
合　　計	4,905,606	合　　計	4,905,606

平成3年度　収支計算書

単位：円

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
会報発行費	176,076	400,000	納入会費	395,000	900,000
総務／雑費	55,127	60,000	雑収入	33,188	0
山岳部活動補助	200,000	200,000	前年度繰越	149,035	149,035
学生保険費	40,000	40,000			
通信連絡費	63,359	160,000			
次年度繰越	42,661	19,035			
計		557,223	計		557,223

平成4年度　予　算　案

単位：円

支出		収入	
項目	金額	項目	金額
会報発行費	400,000	納入会費	1,000,000
総務／雑費	60,000	前年度繰越	42,661
山岳部活動補助	200,000		
学生保険料	40,000		
通信連絡費	120,000		
名簿作成費	180,000		
次年度繰越	42,661		
計	1,042,661	計	1,042,661

編集後記

今年度会報幹事になりました、昭和59年度卒業の稲毛です。

最近は避暑程度に夏山に足を運ぶ程度で、テント生活に若干御無沙汰しておりますが、諸先輩の山行記を読ませて頂くにつれ、改めて山への思いを駆り立てられる気持ちになります。不慣れな幹事の為会報の発行が遅れましたが、何とか忘年会迄に間に合わす事ができ、やや肩の荷が下りた気分です。

次回の会報は来年度の総会迄に必ず発行したいと決意を持っておりますので、また多数の方の御寄稿をお待ちしております。

何卒宜しくお願い申し上げます。

針葉樹会報　第七十八号

編集人　〒167
東京都杉並区南荻窪三―二九―二三
稲毛　尚之

発行日　一九九二年十一月三〇日
発行所　針葉樹会
印刷所　篠田印刷